

第二十 二條派の末流及三條西家

二條派の末流で最も著れた人は堯孝と常縁とである。頓阿の弟子に經賢がある、經賢の弟子に堯尋がある。堯尋の弟子に堯孝（康正元年寂年六十五）が出た。堯孝は權大僧都となつて常光院と號し、二條派の頭目と仰がれ、飛鳥井雅世が新續古今集を撰んだ時には和歌所開園としてこれに與かつた。一條禪閣はこの人を歌林の翹楚だと稱へた。併し古今聲句桂傳附書や桂明抄などの外にはその著作は今日に傳つてゐない。門人東野州の問書中にその説が多少載つてゐるが格別なこともない。同門の堯惠に古今延五記がある、同じ頃の人に堯慶があり、釣舟といふ歌學書一卷を著した。

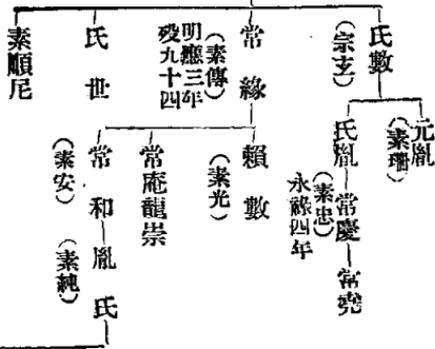
東常縁は美濃國郡上の城主で下野守と稱してゐた。その先祖から歌讀みが續いて出た家筋である。曩祖に重胤といふ人が定家の弟子となり、その子胤行は爲家の女婿となり、その舅家の教を受け、その裔孫益之は常縁の父で應永の頃、今川了俊や堯孝などと和歌の交があつた。

東氏の系圖

重胤胤行行氏時常
 (學念) (素通) (素道) (素阿)
 寛元二年弘長二年正中二年正和元年
 歿歿歿歿

氏村
 (素源)
 永和三年歿

常顯師氏益之
 (伍阿) (素果) (素明)
 應永三年嘉吉元年
 歿歿六十六



尙胤常氏
 (素經) (素山)
 實は元胤の子

第二十 二條源の末流及三條西家

常縁は將軍義政の命を受け、千葉氏の亂を鎮める爲に康正の頃下總に下つて、東の莊で國內を治めてゐたが、應仁中齋藤妙椿に美濃の本領を奪はれ、後詠歌の徳によりて舊領を復した逸話が傳つてゐる。天下が麻の如く亂れてゐた時世に生れ、好學にして冷泉家の説は清岩和尚や木上孝範に學び、二條派の説は堯孝に學んで斯道の大家と免されてゐた。後土御門院の勅によつて上洛し、搢紳家に二條派の歌風を説き、又連歌師宗祇に古今傳授をなした。その著書には東野州聞書二卷、古今十口抄五卷、東家三部秘録、東野州拾唾などの外に、宗祇の間に答へた東野州消息がある。野州聞書は正徹と堯孝とから教を受けた和歌の聞書で、中に名匠の逸話など參考資料が含まれてゐる。十口抄は古今全部の註釋の聞書で、定家の説を本として多少自説も加へてゐる。東野州拾唾は定家の拾遺愚草の歌五十八首を注して宗祇に送つたもので、外題の如きは宗祇又は後の人が題したことはない。東家三部秘録は三代集の中、本歌に用ふべき歌を抜きその據るところを示したもので、古今よりは百二十九首、後撰より百六十五首、拾遺より二百八十三首を採つてゐる。この書は東子爵に一本あるのみで他には傳つてゐない。尙野州の傳書は東子爵の談話によれば夙く會津の松平家に傳へたといふことであるが、今は分らない。

古今傳授といふことは後世には大層八益しいものとなつて來たが、その始はさほど神秘的のもの

てなかつたのであらう。俊成などもその師右衛門佐基俊からその傳を受けたことを長秋詠藻に載せてゐる。つまり當初はその書中に見えてゐる人名などの読み方であるとか、その中の難語、又はその名物の分りにくいもの、或はその歌がどのやうな場合に詠まれたかといふやうなことに就て、好學の士がその先輩に質し、その奥義を傳へる位のことであつたらしい。堯孝の古今聲句相傳聞書には讀癖や難解の語の釋を旨とあげてある。常縁の時も大體はそういふものであつたであらうが、亂離の世とてそれが一種の形式をとるに至つたのである。

文明三年野州が宗祇に授けた古今傳授は古今全部に於ける難語等の聞書と特別にむづかしい歌の解を一ヶ條一ヶ條切紙にして傳授したやうだ。宗長が筆に成る宗祇終焉記によれば、その聞書及切紙は宗祇より又常縁の姪の胤氏に授けたそうだ。蓋しその聞書といふは夙に板になつてゐる古今集兩度聞書（二卷）と同一のものと思像される。抑傳授といふことはその道を疎にせずその物を神聖にするといふ習はしから起つてゐる。ところが今一つ原因は學問或は藝術に堪能の人がこれを廣く人に知らせず、いはゞ專賣權を自ら握つてゐるやうに、多少物質上の報酬を求めやうとするところから種々の形式が起るのである。足利時代には兵亂が屢々も續いて、文藝の退轉を來たし、貴重書籍も大抵兵火に失はれて研鑽するものも少く、考究する方便も不自由となつて來て、世は一體に

文宣に傾き、少し許りの物識が牽強傳會の說を以て下らないことにいろ／＼と勿體をつけて、謝禮などを定めて授けるに至つたらしい。その人と謝禮によつて切紙の數も自ら差別を生じたやうだ。そうしてその切紙の數も始は少くあつたであらうか、後には段々と殖えて來た。二條家當流の切紙は十八通といふ。堺傳授は十五通だといふが、その内容は當流のと粗同じことであるといふ。徳川時代になると松久貞徳の如きは二十二通の切紙を傳へてゐる。その切紙の中には古今集三ヶの大事三鳥の大事といふやうな今人にはあまり益のないものが多い。所謂三箇大事といふのはおかだまの木、妻戸に削花、川名草の三つの解釋で、三鳥といふのは稻負鳥、百千鳥、呼子鳥の釋義である。この傳授は吾等如き門外漢には明かでないが、もとは古今集中の難解なる品物の傳説考證が主であつて、後いろ／＼と附け加へたやうだ。古今集大傳授といふ書には三鳥三木三草の傳をあげ、古今天眞獨朗卷には三木三鳥の外、卷頭の大事、戀卷・卷軸の大事、蟬丸の歌、日神の御歌大事、大歌所の大事等を收めてある。松永貞徳の戴恩記には古今集の切紙傳授の外に伊勢物語の三ヶ大事、源氏物語秘事等を加へてある。又歌道心叢集には一條禪閣の作だといつて、二聖及六歌仙の傳なども含めてある。又ある書には徒然草七ヶの習だの、東鑑の大事までも加へてある。これらの傳授を受くるにはむづかしい誓紙を差出させ、もしその條々を背くに於ては『大日本國神氏並天瀟天神梵釋四

天孫和歌兩神之冥罰、忽身上可蒙罰者也。依前誓狀如件。」といふやうな證文を捧げさせ、ある説は貫之の傳だ、或は家隆の教だ、或は定家の説などと時代を古くして勿體をつけたものだ。喩へて見ると、徳川時代の武士が家筋を尙ぶ所からして系圖を作らせたやうなものだ。自分は清和源氏の分れであるとか、或は某大臣の末であるといふ、くらゐなことを系圖師に作らして得々とした。専門家から見れば似せ物といふことがすぐに分るが、時代が経ると普通の人にはそうかと想はせるやうになつたものである。併しそれにしても一つの物名がなぜそんなに傳授を要するやうになつたかと考へて見ると、これには又相應の理由があるやうだ。言語は時代によつて變る、物名は地方によつて異同がある。そこで詞で示した實物がなくなつて詞だけ残つてゐて、それに人が種々の解釋をつけてゐたりすると、後の人は區々の説がある中、自分のわかりよいと思ふ説によつて歌をよんだりする。それが後に證據になつていよいよ解りにくくなる。今三鳥の一の稻負鳥に就ていつて見やうならば、綱昭は

あふことをいなおほせ鳥の教へすば

人はこひぢに迷はざらまし

といふ歌によつて、庭た、き即ち禊領であるといつてゐる。家隆卿は稻負タウフの音により嶋といふ鳥で

あるといつて、それを自分も

我が戀はいなおほせ鳥のなくなりに

涙やおつる轉のこがれば

と詠じてゐる。又藤原秀能はこれを水雞と考へて、

さよふけていなおほせ鳥のなきけるを

君がたゝくと思ひけるかな

と詠んでゐる。又爲家は壬生三位の歌に基いて、

秋の田のいなおほせ鳥のこがれ葉に

この葉もよほす山風ぞ吹く

と詠んでゐる。これら様々の證歌が後にはものをいふやうなことになる、愈々分らなくなるのだ。

要するに和歌の門閥が出来てきて天才が出なくなつて、すべてが株を守ることが段々とかういふ風になつたものである。

日本全國を行脚して廻つた連歌師の泰斗の宗祇は常縁から受けた古今傳授を一方では公卿の三條西實隆公に傳へ、一方では連歌師の牡丹花宵柏に傳へた。前者は二條家の當流で後者は堺の人であ

る所から堺傳授と稱へた。宵柏から奈良の饅頭屋の林宗二に傳へたものを奈良傳授と名づけた。その大體は同じものであるが、切紙の數など少しづつ、の差があるに過ぎない。

宗祇（文龜二年歿す年八十二）の著には、野州の説を聞書にした古今集兩度聞書二卷を始として百人一首抄や又詠歌大概抄、遠情抄、分葉、吾妻問答、老のねざめ等がある。吾妻問答は二條良基の筑波問答に倣つて連歌の方則を説いたもので、その中には、稽古に必要な抄物、三階段の稽古、本歌の取りやう、源氏物語の付け様、その他名所の好嫌より執筆の法まで示してあるが、願ふに高山宗砌の説に負ふところが多いやうだ。連歌にも歌に似せて未來記といふものが出來たと見えて、連歌の未來記には心の未來記・詞の未來記の二つがあるなどと説いてある。この書は歌の道から連歌の法を説いたものであるが、又歌に關係したことも少くない。「歌の道は唯慈悲を心にかけて飛花落葉を見ても生死の理を觀ずれば、心中の鬼神も和ぎて、本覺眞如のことわりに歸すべく候。」などと和歌を佛法にひきつけて精神修養に資してゐる。又『この道に携り侍らん人はまづ冥加を思ふべし。いかにも住吉・玉津島を仰奉て、直きをあげ曲れるを置き、自他不二の思を専として、人の師ともなり人の弟子ともなつて、終に上手に成り侍らんことを願ふべし。』と説いてゐる。その他萬葉の尙ふべきこと、幽立有心の體を旨とすべきことも述べてある。遠情抄は雨中吟未來記の註釋である。分

葉は同じ語にて意義の異なるもの、及意義の類似してゐる詞の使用法等を説いたものである。その他の著作は二條家の説を株守するところが多く、連歌の上に光を放つやうな優れた説は和歌の上には認められない。

和歌を精神修養の具と考へる風は當時一般の傾向であつて、宗祇の教を受けた東胤氏のかりねのすさみの中にも見えてゐる。胤氏は野州の姪で素純と號した人だ。このかりねのすさみは

一、歌はどういふものか。

二、歌を詠むにはどうしたらよいか。

三、どういふ歌を本として學ぶべきか。

四、用ひてはならない歌の様はいづれか。

の四條に就て述べたもので、中にその一に於ては、『上王道より下萬民に至るまで、心を述べ、春去り秋くれ、花散り葉落つ。是れ皆有爲轉變のことわりと無常心を觀じ、何事にも我とすることを止め、心の邪を避け、欲情貪着を離れ、一心の圓鏡に向ふ時、ともすれば浮び來る愛世のくさぐさのことを心の種として言の葉にいひ出づるを我朝の歌と名づくるなり。』とか、『これ一心の妄想をはらひて本來の實地に至る直路なれば、天地も感動し鬼神も受納すと見えたり。』『この道は世を治め

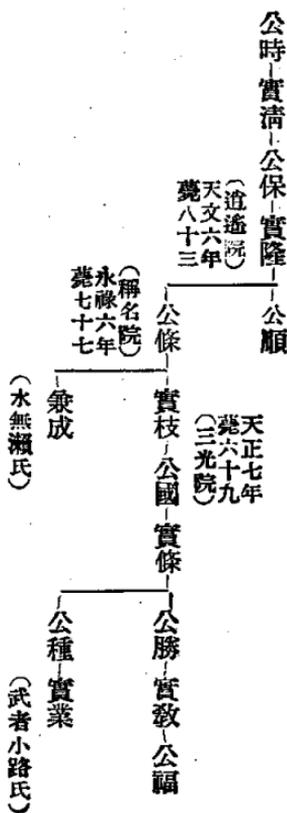
民を導く教戒の端なり。』など説き、二に於ては定家の詠歌大概により、『歌をよむには道を第一にして、時節の景色にも化すれば、全く頓着はあるべからざるものなり。』といひ、三には百人一首を範模とすべきこと、四には未來記雨中吟のことを説いたもので、別に新しき意見はない。

宗祇と同時に猪苗代兼載といふ連歌師があつた。歌や連歌などに關した逸話などを集めた雜談が一巻ある。その他に小倉山莊色紙和歌註、自讃歌註、藤河百首兼載抄、詠歌大概註がある。兼載雜談の中に『歌の三十一字は月の丸きが如し。丸き空ばかりを月と見ては思し。露に宿り水にうつる影どもこそ面白き月なれ。その如く三十一字ばかりを歌と心得て餘情を見ずは曲なし。』といつて幽玄調を主張してゐる。又『歌道には熱心・譜代・祿・器用この四つ不三相叶はば、天下の名譽はとりがたし。』といつてゐる。これで當時の歌壇の狀況が察しられる。宗祇門下に月村齋宗碩があつて藻汐草二十冊を著した。これは歌人連歌の左右に備へたもので、歌詞の分類辭書としてまづ整頓したものだ。宗碩はこの外に勅選名所和歌抄二巻を著した。

三 條 西 家

足利の季世に方つて、堂上家で世々歌人を出しその道の傳燈になつたのは三條西家である。三條西家は正親町三條家の別れて公時卿から始まつてゐる。その曾孫内大臣實隆は始め飛鳥井雅親に學

び、後、宗祇より古今の傳を受けて二條當流の説を傳へた。實に當世に傑出した歌人であつて道通院と號し、入道して堯空と稱した。實隆公記といふ浩瀚な日記がある。斯道の參考資料として大切なものである。



その歌學の書としては三内口訣、詠歌大概抄、詠歌大概音義及歌合判詞などがある。詠歌大概抄は此抄作者、發起、詠歌の二字、和歌の濫觴、題號のこと等につき、和漢の典籍から類例を引いて釋し、詠歌大概音義は天文元年の作で漢文でその要を説いてある。三内口訣は懷中抄と外題した寫本もあつて、詠み方の口傳より、枕詞の解説や、神樂催馬樂などの説明もあるが、格別新説はない。古今涓涇抄は三條西家の家傳本となつてゐるが、恐らくは實隆の説が大部分あるやうだ。その家集

雪玉集は所謂三玉集の一つで當流では草庵集と共に用ひられたものである。

公條は逍遙院の二男で稱名院といひ入道して仍覺と號した。詠歌大概註・百人一首註を著したが、その説は大體先人の踏襲である。當時は兵亂うち種ぎ朝貢も滞りがちで公卿なども窮乏の極に達した。随つて生活の爲に内職をする向も多かつたであらう。同家では古今傳授が收入の一つの道ともなつてゐたやうだ。併し公は歌道を重んじ、容易に之を免さなかつた。載恩記によると法橋紹巴の如きは稱名院より源氏の講義は授かつたが、古今傳授の方は懸望したのに聽かれなかつた。又伊藤某といふものが能登から上つて來て、古今傳授を望んだが聞入られない。家司のものが「何とてさやうに仰せらるるぞ、はや御臺所糶絶えて難義に及ぶ」と申しあげても、人柄を危んで免されなかつたといふ逸話が残つてゐる。稱名院は永祿六年に七十七歳で薨去された。

實枝は公條の子で、始は實世といひ、中ごろ實澄といつた。父祖の業を襲いて三光院と稱し、入道して立覺と號した。その著に詠歌大概聞書などがある。元龜二年伊勢に參向し外官に滞留されてゐた時、人々の請により歌並に連歌の物語をされた。荒木田守平等がそれを書留めて置いたのが二根集である。又一武人の爲に歌道や源氏の不審に就て述べられたものを門人が録した實澄卿聞書がある。書中には二條家六條家の關繫も風俗歌に對する一考察も述べられてゐる。

以上の如くこの一流には歌人も少くないが、大體二條派の守株であつて新しい著書は現れなかつた。併しその頃天下の歌人連歌師は大抵この三條四家に藝を執つたもので、細川幽齋の如きは三光院の高足で、その手によつて當流の歌の道は朝野にます／＼盛に行はれるやうになつたものだ。併し當時の歌學書は詠歌大概、秀歌之大概、百人一首の抄物や雨中吟未來記の註釋等を始めとし古今傳授ぐらゐりに止まつてゐたのである。

第二十一 德川時代に於ける當流 (その一)

細川幽齋

織田豊臣時代に於て二條家の歌學の正統を傳へた人は細川藤孝である。藤孝は文武の嗜が深く衆藝の奥堂に達した武將であつた。天正の十年本能寺の變に織田右大臣のはかなくなられたのを慨いて、即日入道して立旨といひ、後又幽齋とも號した。幽齋は夙く三條西實枝に就いて古今の傳授を受け、斯道の明星と仰がれてゐた。慶長五年關原合戦の當時、幽齋は丹後の舞鶴城に立籠つて遙に徳川勢に勢援をしてゐた。石田方から切りに打手向けられ、事甚だ面倒になつて來た。門人の桂

宮智仁親王はわざ／＼御使を下され嬉和を御勧めになつたが、幽齋は武士道の爲にこの儀ばかりはと御断りを申上げた。けれども一方では古今傳授の亡びゆくのを憂へて、その書きものを箱に入れ、これに

古も今もかはらぬ世の中に

心のたねをのこす言の葉

といふ一首の歌を添へて、源氏抄と共に大内につた。時の帝後陽成天皇は歌の傳統を受けた幽齋が空しく戦場の露と消えるのを惜ませられて、三條西實條・中院通勝・烏丸光廣の三廷臣を勅使として丹後に下された。幽齋は勅命を畏んで三使を城内に延き、上指の矢で時雨の文臺の塵をうち拂つて、古今傳授の儀式を終へ、城を明渡して高野に逃れたことは名高い話である。

一體古今傳授といふことがなぜそのやうに大切なことになつたかといふに、戦國亂離の世にはすべての事が弛廢したが、荒くれた武夫も敷島の道に心掛けなくては武士の嗜なみを缺いてゐるといふので、多少これを修めたものだ。慕京集を遺した江戸城主、春霞集を留めた毛利元就、陣中篝火の影で古今集を繙き、源氏物語の聞書をした新納忠元や、家法の中に和歌を嗜むべきことを定めた北條早雲及武田信玄は古今傳授は受けなかつたが、多くの武門の人士が之を嗜んだ證としては十

分である。又政權を失つた大官人は繼に歌道などによつてその優越權をつなぐといふ有様で、三木三鳥などいふやうな鳥や草木や難語の釋義の外に、歌道を皇道儒佛の教に附會し、三鳥を天子關白庶民に比したり、或は三木を三種の神器に當てたりして斯道を非常に重くし、朝廷に於ても歌道に於ける極秘は王道にありとせられたから、古今傳授を非常に重んじられたのである。智仁親王は殿内に古今傳授の間をお作りになつた程である。又熊本^の細川侯には古今相傳の歌箱を藏せられ、參勤の途次には黒塗金九曜の紋章美々しき長箱大小三個、具足櫃の如く梓に入れ、殿の御駕籠の前に露拂が「下に」「下に」の聲嚴かに守つて練り歩いたものである。

幽齋の歌學の著には詠歌大概抄・百人一首抄等を始とし、伊勢物語闕疑抄、歌仙歌集解難抄等の注釋がある。門人佐方宗佐の聞書した和歌受用集及烏丸光廣の筆錄した耳袋記などによりて、その説を窺ふべきである。その外歌道秘藏錄を増補した春樹顯秘抄を數へるものもある。その詠歌大概抄の中に『一代の和歌の抄物この一冊に決せり』といひ、又『二條家を習はん輩は京極黃門以前の本は用ゆべきにあらず』といひ、その座右には常に近代秀歌・毎月抄・正風體抄・八雲口傳・夜の鶴・近來風體抄・愚問賢註を具へてゐたといふのでいかに當流の殉教者であるかが察しられる。歌體に就きては『まづ遠白體・幽玄體・長高體をよくよく習ひすへて、或は挫鬼體なりとも強力體なりともいづ

れも詠むべし』といひ、『定家家隆は歌の中庸なり』と稱へ、京極中納言の風を甘なひて下の句の強き歌を庶幾してゐたことが耳袋記に見えてゐる。耳袋記は慶長三年から同七年まで、光廣卿が吉田の閑居に、また丹後の田邊に、師翁に隨逐した間の聞書で、纏まつた歌學では無いが、斷片的に拾ひ讀んで見ると中々面白い説が少くない。鶴本末・鶯本末・桐火桶・和歌の伊呂波等の學書は定家卿の名に假托したものだと言ひ、悦目抄は用捨あるべきものだといひ、選集抄は西行の書いたものに、後人が書き添へたものだと言ひ、裏書したなどさすがに達人の眼は高いものである。但し正風體抄を定家の作として尊信してゐたのは吾人には憚らない。

和歌受用集には題詠のことより色紙書様に至るまで初學の參考となるべき作歌法四十一項を擧げてある。耳袋記と違ひ秩序立てて記されたる詠歌法である。この書一に幽齋聞書と外題した本もある。明和七年板の細川玄旨聞書全集の上巻は略々相同じきもので幾らか箇條が少い。これに反し耳袋記別録と題した寫本は條項が豊富に多い。その中に詞の太み細みといふ定家の説を敷衍した箇條がある。『歌を詠むこと、例へば詞は絲なり、紋をなすは心なり。歌は綾羅錦絲なり。作者は織手なり。細く美しき絲の中へ太くあらしき絲の一筋も交りたらんは綾羅織り出しても何の詮か侍るべき。又精選の絲なりとも織手の悪しきはいかが。只歌をよまんは詞の穿鑿肝要なるべし。』といつてある。

内容は作者と心と詞とを面白く譬へたに過ぎないが、語句の洗煉を旨としたことは明かである。これは幽齋の行住坐臥常に唱へてゐた金言であつたと云ふことだ。又上下の照應といふことに就ても細かに考へて、「對語とは歌の上下懸合のことなり。唯歌は問答の如し。喩へば上句に云ひ出したることをば下句にてその心を顯し、下句にていふべき事をば上句にそのつまどりをして歌は詠むことなり。詩の起承轉合などいふが如し。下句にて櫻といはば上句に咲き散る、匂ふ、盛りなど様の詞にて起して下に梅櫻などの景趣をあらはすべきことなり。大方はその體を下句に置きて用を上句に顯すべし。上句に體を現しぬれば、未練の歌は必ず末弱げになるなり。例令歌の理は聞ゆるといふとも掛合あしきは詮なきなり。」と示してある。

その他は前に説いた定家・爲家・頼阿・良基並に順徳院の御説に據つたものである。但し衆藝に長じた人であつたので、徳川家康を始め天下の侯伯より下は布衣の人に至るまでその教を乞ふものが甚だ多く、實に啓蒙時代の明星であつた。慶長十五年歿するや、その友木下長嘯子は慇懃に法師を掉む詞を述べ、天下舉りて愛惜せざるは無かつたといふ。末松宗賢はその歌が源三位に優ると評し、戴ものは定家卿の化身であつたとたたへ、殊に松永貞徳の戴恩記にはその人格につきて多大の讃辭を擡げてゐる。

第二十二 徳川時代に於ける當流 (その二)

雲 上

二條派の正統を承け繼いだ細川幽齋の歌學は一方にては雲上を始め公卿の間に廣まり、一方にありては地下民間に傳はつた。皇室に於ては古より歴世斯道に大御心を留めさせられたが、特に後陽成天皇はみづから名所方輿勝覽二冊を欽選遊ばされた。天象地儀等數十門の目を立て名所を拾く集めて分類し一々例歌を擧げてある。その小分にしたる題の數は六百二十、證歌は千八百二十七首に上つてゐて、索引まで整つてゐるところ、歌を専門とせる人も贊詞を捧げ奉るに吝かならぬであらう。又百人一首抄、詠歌大概御講釋、未來記雨中吟などの御抄も遊ばしたが茲にはその詳を省く。

名所の歌を集めることは正親町天皇の御代に勅選名所和歌抄が出来て以來民間に於ても漸く盛になつた。宗惠の松葉名所歌集、石川清民の楯山拾葉、石出吉深の几右抄、四順の歌林名所考などいふ類はそれである。この傾向は雲上から起つて後には一國一地方の名所歌集を編むに至つた。又幽齋から古今の奥義をお受け遊ばした一品式部卿智仁親王には古今集聞書三卷を始とし、二條家歌會のこと、當流の歌學に關することその他歌の抄録ものは夥しく今も宮内省に保存されてゐる。連歌に

關した御記録も少くない。又同じはらからの曼珠院良恕法親王にも歌論に關する斷片的のものが、詠歌金玉論に載つてゐる。

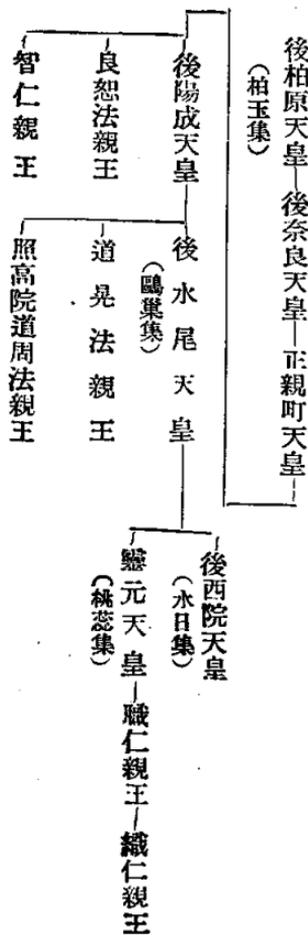
後陽成天皇の皇嗣後水尾天皇も亦斯道に御堪能にあらせられ、寛永二年に智仁親王より古今傳授をお受遊ばしたといふことである。歌道に關する著作も少くない。また御講釋を拜聽した廷臣の筆録も傳つてゐる。天地山海から鳥獸蟲魚に至るまでの題歌をいろは順に連ねてある一字御抄が詠歌の便となつたことは尠少ではない。又一條禪閑の和歌題林抄に基いて四季戀雜の六門に分けて諸書から普く題を集めさせられた欽撰の類題寄書三卷が出題上にいかに便のあるかも論ずるまでもない。又承應二年に皇弟聖護院宮道晃法親王並に照高院宮道周法親王の爲に歌道及歌詞に就いてお認め遊ばした玉露稿の中には優れた歌論がある。又三種のみやび歌、俳諧振、今様の俳諧風等に關する御説を録した和歌聞書を始め、明曆四年五月の御勅講を、中院通茂等が筆記した詠歌大概聞書、情願聞書その他百人一首勅講、未來記雨中吟御抄、可秘抄、和歌作法等の書があるが今々これを説かない。院は夙に選集の思召があらせられたが、世は蘆分小舟で早くその御運びにも至らなかつた。延寶中に至り廷臣に命じて類題和歌集を編ましめられた。全部十六卷、三十一冊、歌數一萬餘首に上つてゐる。爾來續々と類題集が出るやうになつた。即ち新類題和歌集、續類題和歌集、類題落穂

集、新類題落穂集等はそれである。

次に雲上で出来たものと思はれるが、作者未詳の和歌の索引に關する大なる作物があることを附言しておく。これは後水尾院の御時か、若しくはこれより古いかも知れない。書名は分類句集といつて百冊もあつて、廿一代集・六家集・六百番及千五百番歌合等の歌をまづ四季戀雜の順序を追うて、梅なら梅、鶯なら鶯と同じ題の歌ばかりを一と所にあつめ、それを首の句より尾の句まで五句いづれにても引けるやうにしたるもので、極めて便利な重寶な本である。木下長嘯門下の山本春正が選んだ古今類句は下句で上句を引くだけで、その後に出た五句類句は五句いづれにても引かれる便益の書であるが、分類句集は歌によみ入れた各材料を五句いづれにても引かれるからして、その便益は五句類句よりも更に優れたものである。又宮内省には勅選佳句部類といふ本がある。完本がないからよくは分らないが、三十卷以上であつて矢張事物分けにしてある。そうして應仁二年藤原宣親が書いたよしが見えてゐる。これは後柏原院の頃に出来たものかと思はれる。これによつて分類句集は出来たやうだ。

後西院天皇は父後水尾院より古今の傳授を受けさせられ、皇弟の靈元天皇に傳へさせられ、又地下三十六歌仙を欽選あらせられた。靈元天皇はこの道に詣り深く、作例初學考二卷を草し、初春早

春以下種々の歌に關し古今の書より作例をぬきいて、願詠の參考とせられたるもの。又歌合の判に關し緻密の考察を下され、六百番作例及千五百番作例の二書を著し、擇詞などにつき二百五十九條に互つて論ぜられてある。歌合の最も盛んと見られてゐるこの二つの大きな歌合に關し十二分の考察を加へさせられたのは洵に忝ないことである。次に當時の皇室の略系を掲げる。



第二十三德川時代に於ける當流

(その三)

堂上

德川氏時代の初に當つて公卿の中て歌人の多く出た家筋は、烏丸・中院・三條西・冷泉・飛鳥井等の

諸家である。

(甲) 烏丸家

光 廣——光 賢——資 慶——光 雄——宣 定——光 榮
寛永十五年 寛永十五年 寛文九年 元禄三年 元禄五年 寛延元年
寛永六十 寛永三十九 年五十四 年四十四 年二十一 寛永六十

烏丸家は日野の流で、歌に名高い人は光廣から始つてゐる。光廣は幽齋門下の高弟で、長年月の間その師に隨從して前に云つた耳底記を著した。天和の頃大番の士であつた鈴木重矩が、卿の孫光雄の説を録した未來記によれば、耳底記の原稿は長持に一杯もあつたのが、その一部分だけ世に洩れて板になつたといふことである。併し他はどうなつたか、恐らくは散佚したのであらう。光廣は正二位權大納言に進んだ人であつたが、蕩佚て奇行が多かつたといふ。生來入浴が嫌で屋根が漏つても構はない。書齋に塵が堆くても拂はせなかつた人だ。家集黄葉集や職人歌合の外、歌學に關しては面授口訣や公宴御會式などの著がある。春樹顯秘抄も幽齋から受けたものだといはれてゐる。面授口訣には心字の圖を作り、論語・中庸・易などの語を掲げ、歌道の本體としてある。即ち「歌は辭のみに拘りて風情艶を專とするにあらず。心地本原の正直心を本として、日用に行ひ死生を生じ生前を正す。」といつて、陰陽や寶劔や内侍所に配した圖の上には、古今の序の冒頭の一句の外、論

語の『吾道一以貫之、』中庸の『天之命謂之性、』易の『艮其背不獲其身、』大學の『在明明德』の句及顏淵がいつた『在「前」忽焉在「後」』の句を擧げて、和歌性情の深秘となしてある。法橋渡邊友益などはその教を受けたものだ。

友益に和歌遺言といふ一卷がある、光廣卿の教に基いて和歌を儒佛の教と融會して説を立てたもので、數島の大和言葉は萬の道の父母であるといつたり、佛の法も聖の教も歌にあらずば心ゆくまいと説いたり、治國の上には禮樂が大切である、その中詩は樂の爲に作つたもので、詩經は經書の父母となつてゐる。然るに支那には三王の後禮樂がみだらになつてゐるがその遺風を起して上中下悉く禮樂の行はれるやうになつたのは我國の歌に限ると述べ、古今の序に『大和歌は人の心を種と』するとあるが、その種は道德の外五倫の外には求めることの出来ないものとしてゐる。氏の歌に對する見解は極めて廣汎にして宇宙の大法も自然の法則も皆その中に包含せしめてゐる。要するに師家の説を一層敷衍したものである。

後播磨の小野好純が寶曆十年に著した和歌根元抄の説は光廣卿及友益の説に基いたもので、大極圖と歌道とを引合せ、陰陽動靜の圖を以て上下の句に比し、五行の圖を以て五句に配し、乾坤二道の圖を以て戀歌に宛て、萬物化生の圖を雜の歌に擬へ、すべて歌は論語の思無邪の三字を本とし、

五常を兼ねることを説いた。幽齋の曾孫丹後守行孝はこの卿の教を仰いだもので、歌の傳統や歌學書の批評その他の説を記したものに續耳袋記が一卷ある。又歌語の分類的字書の如き立派な覺書も存してゐる。光廣の子の光賢は『人はただ、ゆうに大きに、たぢしろかず、自然なるこそ深く厚けれ』といふ歌を詠んだ人で、一考あつたやうに見えるが、歌學書はあるかないか分らぬ。その子資慶卿の作には門人源頼永に與へた消息や、又或門人の書留めておいた寛文六年の口授などが遺つてゐる。歌道の第一の心得は歌は心の聞ゆると聞えぬとの境を常に考へるにあるとか、和歌の實情は昔から唯一條で變化はないが、風體は改め易いものであるとか、その風體は逍遙院殿の作が専ら善いとか、譬喩の相應又は不相應などいふやうなことを説いてある。

資慶卿の門人岡西惟中（元祿五年歿五十四）が著に續無名抄がある。近世歌人の逸話などを記したもので長明の無名抄に續いたものだ。その隨筆退閑雜記の中に歌道は神道の根本であるとか、萬葉は古詩に、古今は唐詩に、伊勢物語は變風に似てゐるとか、和歌の傳統や二條冷泉家のことから、古今集序及百人一首の讀みくせなどが斷片的に説いてある。又和歌と漢詩文の思漢の一致せる例を載せてゐる。この外に名所題林や近來風體、和歌秘密抄等の著もあつたといふことであるが、近來風體はまだ管見に觸れない。

資慶卿の子光雄も歌人であつて、その口授を門人の録したものである。學書や作法等に就いて述べてある。古今集は歌の命である、家の三代集の中、續後選は歌の體相の至極である、六家集の中では第一に玉二集を見るがよい。三玉の中では雪玉は當流の姿であるなどいはゆる當流の説を述べてゐる。又集の部立は色空の二つであつて、四季戀は色に屬し、哀傷は空の心であるといふやうな佛説にあてた説や、源氏物語はすべて歌の註であるといふやうな説も見えてゐる。又創作時の態度や詠方についての説が詠歌金玉論に收めてある。『歌はもと心を清淨にして無一物にてよむべし。我々も題にて歌よむにひとへに歌書などいろいろ見て後に、何もかも皆取りすてて、住所を清くし、念頭を涼しくなして、時雨の題ならば時雨にぬれ、霞の題ならば霞に交りて詠むなり。』の如く精神集注といふことと、題詠に際しても實際の氣分をもつべきことを示したものである。『歌は心に僅に物を隔ててゐれば 思ふ所へ情ゆかぬなり。只心と題とその題の物としたしく一體になつて詠むべし。』とか、『歌は第一に心頭の無事に基づくべし。心頭の妄想隔れば歌宜しからず。その時に無理によめば眞の處へ至らず。是非ともに行かんとすれば、いばらからたちにかかりて身を害ふが如し。云々。後水尾法皇も禪法を知らずば歌はよまるまじきかとぞ勅説ありけるとぞ。心中の隔物を除かんに爲なり。』ともいつてある。

光雄卿の門人松井政豊は覆耳袋記を著し、鈴木重矩は未底記を著した。また卿の教を受けた阪光淳は種々の著作を遺した。詠歌入門・和歌格式・和歌用心記・諷詠覺悟抄・拾題辨知抄・和歌禁忌慮之辨等いづれも歌學に關するものであつて、中に諷詠覺悟抄は題詠の法を説いたもので、天象、時候、地儀、居所、鳥獸、草木、器物、衣服の八門に分け、その中に細かい題を擧げて詠むべき意を述べ、説き、拾題辨知抄は二字三字四字の結題の詠み方を示し、和歌用心記は當流の教、歌詞及詞の續けがら等を聞書したものである。和歌格式はてにはの傳、本歌取のこと、六義及十體のことが記してある。和歌禁忌慮之辨は寶永五年の作で、禁忌の詞、遠慮すべきこと、及制詞に就き、古書並に師説を引いて意見を述べたもので、詞に善悪なく續けがらによりて、その差を生ずることなれば人と場合とに由つて斟酌あるべく、これを以て永世禁制したものでなからうと論じてある。當流を奉じながら一見識を立ててある。

光雄の孫光榮の子に資枝があつて日野家を襲いだ。一體日野家で斯道の宗匠に許されたのは大納言弘資から始まる。弘資は後水尾院の御教を受けた一人である。詠歌金玉論中に本歌の取様に關するその説を收めてある。長府侯毛利綱元、一の關侯田村宗永も共にその教を受けて聞書を遺してゐる。一は野江問答といひ、一は宗永聞書といふ。この二書を合せて江阪紀聞と外題した書もある。共に

歌草奥書などを旨と集めたものである。又聽嶽院聞書といふ學書もあるが、大にその家學を發揮したのは資枝卿である。

(乙) 中院家

中院家は久我源氏の一流である。右大臣通親の子通方から十三代目に通勝が出て、岷江入楚といふ浩翰な源氏の註釋を書いた。母は稱名院の女で歌の血を受けてゐる。也足軒と號し入道して素然といつた。古今傳授は幽齋から受け、又歌の叢書を作らうとして種々の集をかき集めた。天正中和歌玉屑抄を著したが、主に懷紙の書き方等を記したものに過ぎない。その子孫には歌人が出た。

(後十輪院歌集)

(老槐集)

通 勝——通 村——通 純——通 茂——通 躬

慶長十五年 承應二年薨 承應六年薨 寶永七年薨 元文四年薨
 享年五十五 年六十九 年四十一 年八十 年七十二

内大臣通村は通勝の子で後十輪院といつた。後水尾院に重用された人て、傳奏役として江戸に下つた時、三代將軍が古今傳授を望まれたのを素氣なく斷つた爲に、長く江戸に淹留することを餘義なくされた話は有名なことである。未來記や雨中吟の註釋が傳はつてゐるが、その他は分らない。

通村の子通純は莊子を見て歌をしあげた人て、歌は中々上手であつた。その子が通茂である。通

茂は中院家では最も優れてゐた歌人であつて、後水尾院から古今の傳授を受けた。水戸光圀公と親密であつたことは年山紀聞に見えてゐる。宮仕して内大臣従一位に上つた。晩年に溪雲院と號した。その著には類葉和歌溪雲抄、詠歌大概聞書、未來記抄等がある。又門人松井幸隆の録した溪雲問答がある。この書は一名を中院通茂公口傳ともいひ、主として題詠の法や用語の格を順序なく記したもので、溪雲抄は難解の歌語をいろは順に並べて簡単に註釋してあつて。いはば歌語の中字書である。詠歌金玉論中にもその歌學說三條が擧げてあるが、格別新しい説もない。試にその數條を引いて見やう。初學に對しては、『まづ心すぐに、安らかに、句作りのびやかに、綺麗に涼しくよみ候ことにて、歌の善惡を知るやうに諭し、稍進みたる人に對しては『歌の詠方に格のあることに候。その格をはなれ、心詞をも我物にして詠むくらゐならでは上手とはいはれぬなり。』と教へ、また世人の陥り易い弊を指摘しては、『優美すぎ、理窟すぎ、巧すぎなど候ふ事は大體の穿鑿にて候。優美過ぎたるは詞を飾り理を忘れたるにて候。眞の優美を知らざる故にて候。理窟過ぎたるは道理まかせにて情に出てざる歌にて候。巧過ぎたるは優なる體を存せざる故にて候。歌巧ならずして、細かに、理窟くさからず道理親切に詞を飾らずして優なるがよく候。』と三過説を述べ、餘韻の大切なることを

畫に比べて説いてゐる。門人似雲の詞林拾要の中にその説を擧げて、『歌も畫の如し。探幽の繪、松に月をかけば片端より松の枝少し出し、ちよつと月をあしらふなり。云々。探幽などの畫は筆少にして餘情限なし。歌も亦此の如し。』と宣べられた。と記してゐる。又詠作する時の心を作る爲に佛學の必要なることを論じたことは門人越智正倚の席話抄に『父通純は莊子を見て歌仕上げられたりといはれしなり。此方は禪書を若き時より精を入れ見て、それが餘程たしなみになりたるやうに覺ゆるなり。その方なども歌の書ばかりにては中々濟むまじければ、何ぞ佛書を見られたらば善かるべし。禪書は見損へば結句害になるゆゑいかなり。句移りの爲には論語など儒書もよけれども大様なものなれば歌の心の益にはちと遠きなり。佛書はひきしめていひたるものなればこの方宜しかるべし。』と公の言を録してゐる。門人には松井幸隆・越智正倚・京極高門・林直秀・岡田朴・三輪執齋及雲泉等がある。中で最も著はれてゐたのは幸隆である。

幸隆は本姓山田氏、掛川の人で上京して松井家を襲ぎ、町奉行組與力となつた。中院家の門人となり、六窓軒と號した。古今集類題や三玉集類題を作つた人で、通茂公の歌學説を聞書にした溪雲問答がある。又未來記雨中吟聞書もある。その著作の中優れてゐるのは愚問賢註六窓抄五卷である。愚問賢註の註釋としてはこの書が最も整つたもので、よく當流の説を盡してゐる。度會常彰はその

門人であつて、藝林珠璣といふ叢書を作つた。幸隆の説を聞書にしたものに六窓塵談がある。

越智正倚（正徳四年歿す年六十八）は寶永の始に知海抄一卷を著し、井蛙抄に説いたる本歌取のことを委しく説明し、同五年に席話抄三巻を著し、學書や假名遣のこと及抄物を見る心得や歌人の逸話名吟などを説いた。その中に「人は唯下を見るがよし。歌は必ず下を見るべからず。歌を詠む時は、天地同體に心をおしひらき、何事もうけ入れて障らず、ゆたかに、平かに持つべし。孺子の井に陥らんとするを見て助くるに、怒れる心をもちて助くべきや、名利の爲又は思慮分別にて助くべきや、たとひ怨敵の子なりとも、孺子の何心なく井に陥らんとするを見て、何者かこれを助けざる。その助くる時の心は孺と一つなり。思慮分別に渡らず。歌道これに同じ。」といつて、創作時の態度などを説き、長嘯子の歌風に批評を下してゐる。

通茂の嫡男通躬やその弟で野宮家を襲いだ定基は共に靈元法皇から古今傳授を受けた。その弟の通夏は久世家を襲いだ。是も歌人て、『歌は扇の骨の如し親骨のやうにまつすぐに筋とほりたるは誰もよしといふ』などの説が、詠歌金玉論に収めてある。

(丙) 三條西家 附 清水谷及武者小路

三條西家のことは既に前に記したが、その後葉に就て更に述べる。同家て徳川の世になつて著れ

たる歌人は實教（元祿十四年薨す年八十三）である。卿は幼にして父の内大臣公國（寛永三年卒す年三十）に別れたので、祖父三光院の教を傳へた細川幽齋から、家學を承け繼いだのである。三光院の父稱名院は晩年には心高く詞を飾らず義理一片の歌を詠んだとの評がある。その血を受けた勢か、實教は實ある歌を喜んだ。その言に『和歌は作を本とせず、造り立てたるは嫌ふことなり。うすき物なり。掘り求むるが悪し。實のある歌が第一よきことなり。』といつてゐる。この立場から情を最もつくした戀歌を以て總べての歌の根本とした。その歌話の中にいへるやう。『歌はただ皆戀なり。戀が本なり。見花といふ題は見戀なり。待花は待戀なり。尋花は尋戀なるなり。』とも『戀の歌は暖かなる歌多きなり』とも述べてゐる。また門人への消息にも『歌はただ戀の歌の趣向を種として詠まんにはしかなく候』とも答へてゐる。戀歌につぎては哀傷の歌を重んじた。その理由は『歌は戀の歌と哀傷の歌とを詠むとの教に候。この二情は皆心から實に出るものなり。誠から出づる故に候。四季のものは皆花に對へば、その景氣等花が教へ申し候。月雪等その外何にても皆向からにあり候ゆえに此方の心からは出でず候。』といつてゐる。今の詞でいへば客觀詩より主觀詩を貴んだのだ。實教は當代の歌に飽きたらなかつた。『今は和歌繁昌したる故に結句繁昌せぬなり。不繁昌は却つて繁昌する道あるべきなり』といつて、古い所に目をつけた。併し二條家の風を傳へた

家だから、遠く萬葉までは溯らない。ふるの中道たる古今を以て歌の體を見るに第一となしてゐた。同じ二條派に屬してゐても中院家では新勅選をよめと勤めるのは大分趣を異にしてゐる。八條宮智仁親王や中院前内府(通純)が草庵集を貴ばれるのを評して、『兩人共に今少し指南の足らざるところなり』といひ、『風體悪しく優美なる所なき歌詠みには、頓阿などが歌善きと教へ、又あまり美しき歌ばかりにて弱き歌詠みには、實のある歌をもてこの歌見よと教ふることなり。』と附け加へた。二條の流て頓阿をかういふ風に批評するのは異數である。又之を家隆の歌に比して『家隆卿歌と頓阿歌とは風體うつくしくて似たる所あれども、頓阿とは大に變りたるなり。家隆歌は實にて位あることなり。』と説き去つてゐる。さて茲に位といふのはつやのことである、ひかりである。つやといひ光といふはその歌の徳が外に露れたるもので、この位には時代の風尙がある。當代には近代の風が合ふことながら、まづ古歌を見て能き位を心得さて後に新歌を見るが宜しい。古歌にも善悪がある。それを見分けて『人の食のわけを食はざるやうに詠むがよい』と述べ、又拉鬼體を釋しては強き心の歌であつて、それにはてにをはの少く、詞にて詠みたる歌をいふと説いてある。これも一隻眼を具したものと謂つて宜しからう。

次に歌を詠むには精神が樂易でなければ善くないといひ、自家の境地を敘して『實教が歌を思案す

るほど面白きことはなく候。……歌は苦勞に思ひては成るものにてはなく候。面白きと思ふ心つかずはあがるまじく候。』といひ、又あまりに法則に拘泥するを忌んだ。その言に『難あらんとも構はずに詠むべきこと詮なり。さやうにさへ詠まばあがるべきなり。』とこの主義から百首獨吟の場合に於ても無題で詠むが宜しいとし、『題にてよめば題に合せんとする故に窮窟にて活らかず歌こせるものなり』といひ、又題詠をなすには『題をかへて詠むよりも同題で五首も十首も趣向をかへて詠むが善く候。』といつてゐる。又風體に就ては個人又は一集の風を知つて居て之に則り、その異なる風を各別にならひ詠むが宜しとしてゐた。即ち『風體は誰は實隆公の歌の風體を詠むべし。誰は定家卿の歌の風體にて詠むべしと、如此子細に風體もかへて詠めば、自ら誰の歌の風は如此誰のは如此と人々の風體も知りてよく候。……この集の風は如何、この人の風は如此此とこの風を知る程になくては不叶事に候』と、斯ういふ考から百首などを詠むときは、この題では何首は古今の歌を取つて詠むべし。又この題にて何首は伊勢物語にてよむべし。何首は源氏にて詠むべし。又何首詠は萬葉にて詠むべしなどと教へたのは、古調近體に詠み分けることを主張した鈴屋翁に範を垂れたものと見てもよい、固よりその精神に於ては違ふことであるが。

次に試作を終へたら直に補正にかかるは宜しくないと信じ、『歌は詠んでそのまま吟味すれば、心

が違ふて是非が定められざるものなり。詠んで打ち捨て置き一日二日にてもあいをおいてから吟味すれば、是非がよく見ゆるものなり。」と述べてゐる。二條派としては珍しいほど自由な所があつて和歌の大事には傳授すべきこともあるが、詠歌大概の序の『常觀念古歌之景氣可レ染レ心』の文にて済むことだといつて、秀歌は百人一首詠歌大概（これは秀歌之大略を指したものだ）を準となすべく、二書の中では百人一首は即妙を感じて採られた歌が多いから、むしろ詠歌大概の歌を擇ぶべしと説いてある。橘守部の百人一首に對する考はこの書に根ざしてゐる。

次に歌の想の浮ばないときは三重韻を見よと教へた。その理由は彼の書にはさまざまのことを集めてあるから、見もてゆく中に自ら種々の思付が生ずるからといふのにある。これは後水尾院が歌には本草綱目を見て可然との仰に似た考である。従來歌人は歌學に通ぜず、歌學者はよき歌を詠まず、歌學と詠歌とは兩輪の如くあるべきだとの考は二卷の歌話に見えてゐる。

實教の従弟で清水谷家を襲ぎ權大納言に進んだ實業は祖父の血を受け、卓れた歌人であつた。和歌作法に關する口傳書を遺してゐる。その門に贊を執つて教を乞ふものが常に少くなかつた。梅月堂を開いた香川宣阿はその高足である。左にその略系を擧げる。

宣阿——景新——景平——景柄——景樹

享保二十年 元文四 寛政六年 文政四年
 歿九十 年歿 歿六十八 歿七十七

宣阿は常流を強く守つた人で、草庵集を嗜んで、兒女の爲に正續草庵集蒙求諺解十五卷を著し、又和歌名勝志や新勅選抄を作つた。香川家傳書といふ三卷本がある。多分、宣阿から傳へたものであらう。五義・親句壺・疎句臂・別傳心讀・和歌切字・和歌四切を始として當流に傳へる様々のことが録してある。寫本によりては和歌詠方詞心傳集と外題したのもある。宣阿の門人には、野村尙房(享保十四年歿) 伯水堂梅風が著れてゐる。梅風は新後明題和歌集・部類現葉集を編んだ。尙房には一枝堂隨筆・桃玉三事抄の著がある。又松平黃龍公の爲に、和歌立々抄を選んだ。

序に武者小路家のことを一言しておく。三條西實條の二男の公種が分家して始めてこの家を立てた。公種は元祿五年に薨じて、その子實陰が続いだ。これは有名な歌人で、實教卿とは再従兄弟になる。實陰及其の門下のことは元祿以後の堂上歌人の條に述べる。

(丁) 飛鳥井家

雅親——雅俊——雅綱——雅春——雅敦——雅庸——雅宣——雅章

文祿三年 天正六年 元和元年 慶安四年 延寶七年
 薨七十五 薨三十二 薨四十七 薨六十六 薨六十九

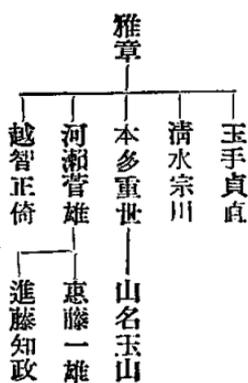
飛鳥井家のことは前にも書いたが、新續古今集を選んだ雅親の曾孫に雅春といふ人があつて豊太郎の歌の師範となつた。その孫の雅庸は徳川家康に家の系圖や歌道宗匠日記などを贈つたり、源氏物語を講じたりした。その孫の雅章は後水尾院から古今傳授を授かつた一人で、慶安元年の仙洞御歌合には判者の地位にすゑられ、雅親以來最も優れた歌人である。短冊や懐紙に關することを記した飛鳥井家式や題詠につきての注意十數條を示した知題抄や、序分抄及百人一首御講釋聞書等の著がある。詠歌金玉論中に「歌は才覺た、すこと一つの病なり。唯常の詞にて面白く續くるがよきなり」とか「歌は三句より詠むものなり」等の説が載つてゐるが別に所説は見えない。

その門下には詠歌大概秘訣直談鈔を書いた玉手貞直や、水戸光圀の爲に正木のかつらを選した清水宗川や河瀬管雄等がある。中にも管雄は最も歌學に長じ、榮雅の和歌道しるべを増補し、詞や證歌を雜へ、會席の用に充てる爲に、四季戀雜の部六卷、制詞一卷、名所二卷、都合九卷となし、元祿二年に上梓した。又その翌年に詠むべき事物の名をいろは順に集め、註を下し會席用に供する眞名草を上木した。これら啓蒙的の著作の外に、古今見聞抄五十卷、草木名所考二十卷の如き大著を遺した。

前書は太秦の惣持院に籠つてゐた時の作で、古今序は十二段に分ちて詳説し歌の解釋は舊來の詠

説をあげ、次に自案を加へたものである。後者は名所に詠まれた草木を國分順に廣く集めたもので、草の部は葦から芋まで八十八種、木の部は梅より紅葉まで五十六種に上つてゐる。その他菰枕三卷を著した。この書は名所を詠んだ名物の歌を一物毎に集めて、いろは順に連ねたものだ。これらは歌論には關係はないが、大に當時の歌人歌學者を益したものであらう。

菅雄門下の惠藤一雄は古來著名の歌學書十九部を選び出て元祿十五年和歌古語深秘抄(十卷)と題して出版した。歌學叢書の出版は實に之が嚆矢であらう。拾題和歌集も同人の選である。同門の進藤知致はねなしかづらを著した。

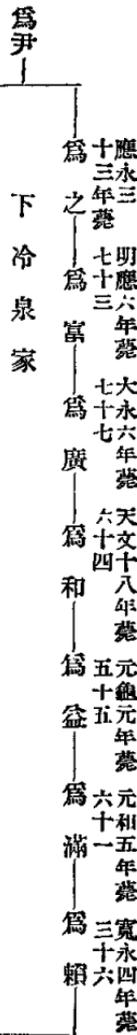


(戊) 冷泉家

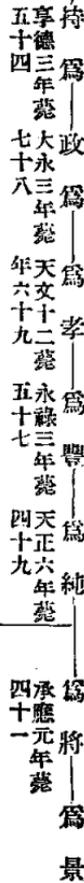
等しく堂上派であるが、冷泉家は當流即ち二條派とは會式作法その他故實等に於て多少の差異が

あつたことは前に略説した通りである。足利時代の季に於て上下兩家に分れた。その後葉を擧げて見れば次の様だ。

上 冷 泉 家



下 冷 泉 家



惺窩



中 上冷泉家には徳川時代の始に方り爲滿が出た。爲滿は爲益の子で、爲益の著には和歌雜抄があ

る。四行の歌評・類聚歌林の説及四病八病十八體等に就きて論じてある。爲滿は正三位權大納言に墮つた。徳川家康に古今傳授をなし、また歌道の講義をなし、愚問賢註の開講を行つた。その筆録は後元祿中に至り爲滿卿和歌講談と外題して出版された。下冷泉家には碧玉集の作者政爲以降その人が無かつた。惺窩先生の子にして、六代目爲將の後を襲つた爲景に和歌口傳が一卷傳はつてゐるばかりである。上冷泉家には爲滿の曾孫爲綱その子爲久共に歌名があつた。爲久の歌學に關する説は詠歌金玉論中に三條が収めてある。その中に世人が和歌を詠み易きものと心得て素養のないことを慨き、趣味の涵養が無くては類題などにすぎり、それから心も詞も拾ひ出して三十一字に捏ね合せても駄目であることを論じてゐる。『題に向ひてまづ心をさし置き、類題その外古歌部類を見、その中心に心も詞も拾ひ出して三十一字をこしらへて出さるゝに、そのこしらへやう不調法なる所を相談の先進あそここを引き直されざまに又初の古意になるなり。貴賤の人情世上の盛衰天地草木禽獸の上まで常に風情を思ひ置かては俄に何として新意を巧み出すべき。常にうか／＼として題に向うて是は何としたるものぞと初めて驚きせん方なきに古歌にて取出したるものなり。俄に襲ひ來る敵を見て弦なき弓に根の失せたる矢をつがふ擬勢なるべし。近來の歌とくと吟味せばこの等類の咎なきは有るまじく候。』といつてゐる。爲久の子爲村は堂上有數の歌人て、冷泉家の中興とた、

へられ、その門人も極めて多いが後章に委しく述べる。

爲久の門下に仁木充長や幕府の書物奉行をしてゐた成島信通等がある。充長には在京隨筆及仁木隨筆がある。享保中部に上り宗匠家の教を受けた間に記し留めたもので、仁木隨筆には二十一代集の長歌のしらべを始めとし、四式五體腦に關した條も見えるが、獨創のものはない。

第二十四 當流に於ける地下派

幽齋は歌學を堂上の人々に傳へたばかりでなく、諸侯の中には島津義久にも授け、布衣の人では松永貞徳（承應二年歿す年八十三）にも傳へた。貞徳は二位法印の外九條玖山公等五十餘人の師に従つたことを戴恩記に録してゐる。彼が三條大橋の袂で徒然草の辻講釋をやつた話は名高いものだ。年老いても童服を著け、自ら長頭丸と呼んで、その徒と俳諧を賦したり、東山大佛殿の傍の梯園で同人と歌を詠みかはして老を忘れてゐた。千部の法華經を覆刻したが、その目的が數島の道に志ふかき三世の人々、特に自分を教へ導かれた人々の菩提皆具成佛の爲であつたことは經文の跋に出つて知られる。戴恩記には和歌師傳のことや、古今集等の切紙傳授の目錄及和歌三神のことなどが記し

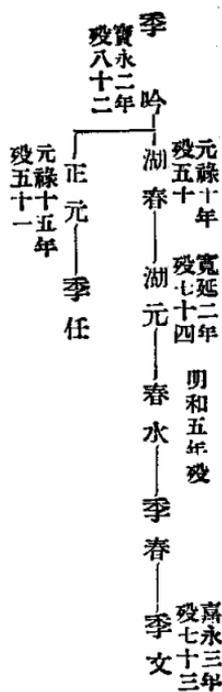
である。氏の三神は、世俗の所謂柿本、住吉、玉津島三柱の大明神ではない。人丸、貫之、定家の三尊である。傳統を生命とせる貞徳の説としては面白い。その理由とする説を擧げて見ると定家卿の眼と見給へる歌書は古今集一部である。然れば多くの歌仙の中にも貫之を師匠と立てられたのである。その貫之は又人丸を師匠と仰がれたのである。そうして『人丸世に出て給はずば、争てか八雲の神詠世に起らむ。貫之古今を選まれざれば、争てか世に人丸を獨歩の才と知らむ。定家この邪正を糺されずんは古今集も徒ならむ。』と述べてゐる。さすがに遠人の眼は高い。幽齋より聞きがきの歌學書もある。鴨長明が無名抄に基俊の悪口を云つた條につきて、當時の新舊兩派の軋轢から起つたもので必ずしも公正でないとしてゐるのも流石に一隻眼を具へてゐる。その注釋としては百人一首抄や堀河百首肝要抄がある。その他歌林樸樾二十八卷の著がある。これは日本紀・奥儀抄・袖中抄・童蒙抄の詞、その他故事ある詞をいろは順に集め、諸家の解説を擧げて次に自説を述べたもので、これは大きな歌の辭典といつて善からう。併し彼は歌よりも俳諧の方が長所であつた。俳道に於ける貞門は其門下は洵に多士濟々である。歌道の門人としては加藤盤齋・望月長好・北村季吟・和田以悦はその尤なるものである。

加藤盤齋(延寶二年歿す年五十四)は名を等空といひ冬木齋と號した。寛文九年三部抄増註十卷を

著し、その始に幽齋抄を引き、貞徳の説を擧げ、次に自家の案を加へてゐる。又梶井宮慈胤親王の仰によつて愚問賢註の抄を作つた。當時は古書の蒐集覆刻が盛んで、學者は頻りに類書を作つたり註釋することに骨を折つた。盤齋の如きもその一人である。彼の註釋には新古今和歌集増抄とか、首書百人一首抄の如き歌ものの外に謠曲の註もある。盤齋の歌に對する考は神儒佛三教を一つにくるめて歌に當てはめやうといふことが、多くの前輩よりも一層烈しく表れてゐることである。九條玖山公は一切藏經も歌書であるといひ、烏丸光廣は論語や易の語を歌道傳授に引いてゐたが、盤齋は和歌の三部抄を以て神道家の舊事記 日本記 古事記に比し、又之を天台の止觀文句玄義の三大部に擬へ、眞言の大日經、蘇悉地經、金剛頂經に准じ、または三部抄を經書にあて、初學入徳の門だといひ、或は詠歌大概を文選の文賦にあて、詞・心・風體は大學の明德親民止善と同じく三綱領だとか、歌の五句は五體に同じとか、三十一字は佛の三十二相の中平生は見られない所の非見頂相を除いたものと同じことだなどと説いてゐる。

歌の解釋に關しては幽齋の説を受け、字源上より説明を試み、歌の字の篇の哥は柯で、旁の欠は風で、目に見えない風が木の枝にあたつて知られるやうに、目に見えない心が言葉によつて、その姿が見えるものが歌であるといふやうに説文學の上から説いてゐる。次に詠歌大概の中の情は新を

以て先となすの義を釋して「古人は上代なる故に、種となる心は善かりし故に、云ひ出す言葉も誠あり。末葉には種となる心あしくなる故に、古人の跡を見て、それを學ぶが新にするなり。」といつてゐる、後世は人心の誠がうすくなつたといふことは古よりいふ説であるが、これでは清新といふことは終に得られない譯になる。蓋し盤齋のみならず、堂上派の説は一般にこういふ傾向を有してゐる。北村季吟は註釋家の泰斗で、源氏、枕草子、徒然草のやうな中古並に近古の文學書を註釋するのみならず、歌書も、萬葉拾穗抄、八代集抄、歌仙拾穗抄、堀河百首拾穗抄、百人一首拾穗抄などといふ多くの註釋書を遺して後人を導いた。その外詠歌者流の爲に和歌詞の抄十五卷増補和歌題林抄八卷を著した。併し彼の著者は古説を蒐集するにあつて、更に獨創の見はない。唯注意すべきことは、京都の新玉津島社の祝人から拔擢せられ、元祿二年その子湖春と江戸に到り、五代將軍綱吉公の恩願を受け、元祿十四年法印に叙し柳營の和歌所となり、子孫世々その職を襲つたことである。貞門の中、盤齋や望月長好は京都に残り、季吟は江戸にあり、貞門の人々が西に東に地下派の歌を掌つてゐた。北村氏が世々と歌所の法印となつたことは儒學に於ての林家と同様な關係である。左に北村家の系譜を擧げる。



望月長好は廣澤に住んでゐて、『霜ふむ鳥』の秀吟に依つて鳥の庵とも號してゐた。延寶九年六十
 三で歿した。その歌學上の著に詠歌大本秘訣が五卷ある。これは二條派即ち當流の歌學の要旨を述
 べたもので、第一卷には歌の三義が説いてある。所謂三義とは風體、心、詞の三つである。而してそ
 の説は俊成定家以下諸宗匠の説を撮んであるが、最も多く據りどころとしたのは頓阿の井蛙抄・愚
 問賢註及細川幽齋の説である。二卷以下は後世にいふ擇詞論であつて、末の方には制詞用捨詞以下
 庶幾しない詞を詳しく説明したものである。その冒頭に

夫詠歌之道者其根發ニ於神代、其枝瀾ニ於皇代。

其功者解ニ怒憂惡欲之情於天地人物之理、改ニ僞諂奸偽之業於花鳥風月之感、通ニ五行鬼神之道、
 調ニ五典人倫之方ニ是也。

其術者未_レ至知_二四夷於籛中_一、未_レ參見_二百僚筵下_一、而取_二萬古_一遷_二於即時_一、率_二千生_一來_二於目前_一是也。

其利者不_二羽化_一御_二于月_一、非_二證果_一坐_二於花_一、隨意變_二天地_一、自由化_二萬物_一是也。

其德者正_二言語_一、理_二乎音聲_一、上_二譽於公上_一、遺_二名於後葉_一、露_二乎父祖_一、貴_二子孫_一、起_二其孝_一老、作_二其慈_一兒是也。

云々と大層勿體をつけて述べてゐる。當流の虎の巻の神髓であらう。次に『やまとみことの歌は、玉垣の内つ國の風俗として、貴賤賢愚のわいだめもなく、心を天地に廻らし、言葉を月花によせていひ出すに、自ら善にすすめ惡を止むるの法ならずといふことなし。……他の邦より傳へ來る三の教にも叶ひ、元來神の教へし道なれば、八百萬の神慮にも應じ、朝日子の惠深かるべし。……是を翫ぶに五つの交り自然に和し、六の塵拂はざるにゐることなし。かかるめてたき道をあだなる技藝とのみ思ひて道の助とする人稀なり。たとひ實の志あるも二條家の正統を受けつがざればその徳あらはれがたし。家の三義等を受け得つれば、和歌の徳我ものになりて則三神の應護にもあづかるべし。』といつて、次に三義を説いてある。和歌が國民文學で自然と交渉のあることをいつてゐるのは珍しい説ではないが誤まつてはゐない。併し之を神聖にしようとして、三教に引きつけて、道徳教科の

具のやうに説いたのは當時の習にひかされたもので、殊に二條家の正統を受けなければといつてゐるのは、その派に囚はれてゐる。我が佛尊しの類である。三義の詳説はここには略するが、先に掲げた詠歌之道者云々その功その術その利などを説ける文を取り、これを詠歌本紀に比べて見るに、本紀の方には多少言句の加はつた所もあるが、大體は同文と見て宜しい。然るに今この二書の關係を考へて見るに、元來詠歌本紀は大成經の一部分であつて、聖德太子の作のやうに書いてあるが、美濃の黒瀧山の僧潮音が恣に僞作したものだといふので、彼は延寶中八丈島に流された。延寶九年に歿した長孝が、幕府が没收したこの詠歌本紀の説を勿體ないものやうにして採つたのであらうか。それともこれと反對に長孝の説が先づ成つてゐて潮音がそれを採つたものであらうか。容易に疑を決しにくい。或は別にさういふ文のあつたのを兩方が交渉なしに引いたのかも知れない。尙考究を要する。併し自分は今は第三の假説の方に重きを置く。さて詠歌本義には詠道に體・相・用の三科を立て、その體を體・用・徳・功・術・利の六品に分ち、その相を豎横の二品に分ち、更にその豎を六義六部に、その横を八體八製に小分し、その用を内修外行の二つに分けてゐる。これを表にして見れば次のやうである。



この詠歌本紀を本として歌學を立てたものも別になてはない。武州府中の人依田貞鎮（明和元年歿す年八十四）は先代舊事記を尊信し、新學入門の便に供しようといつて、この詠歌本紀の詠道三科の要を解説し、各風格に一首づつの歌を擧げてゐる。長孝の著にはこの他歌道或問といふ一冊があつて、拙著歌書綜覽にも擧げて置いたやうに、『和歌は修身齊家の具にあらずして、唯日本の風俗、人の慰となすべきや如何。又人の執着心を除くに便ありとの説は受けがたし。俗語交るとも眞實胸中より出づるは歌ではないか。その他歌道と神、儒、佛三教との關繫いかに』といふやうな問

題を掲げ、一々これに當流の立場から説明してゐる。長孝の著には尙古今仰戀などがある。

以上の外貞徳が俳諧方面の門人平野貞室は、匠材抄や事文類聚、玉燭寶典、漢汐草等の諸書を參考とし、四季草木行事十二巻を著し、四季の草木を月々に分ち例歌を擧げ、歌や連歌を學ぶ人の爲にした。野々口立圃の門人白梅園鷺水は、和歌淺香山八冊を著し、初學者の和歌を心得べきこと、歌を案する用意、歌の心・詞・風體・三資・三易などのことを袖珍本にして世に出した。

長孝の門下には平間長雅が著はれてゐる。長雅は住吉に住み、風觀齋又は六喻居士と稱し晩年には池田の久安寺に隱栖した。生來佛法を好み、二十一代集等の釋教の歌をぬいて片岡山や富緒川を著し、詠歌大觀譚密註、百人一首講談密註を著し、和歌血脈道統譜を作り、題讀曲切紙などを遺した。道統譜に神代からの系譜を書いたのは滑稽であるが、二條派の教はよく繼承した一人である。

片岡山や富緒川は刊本が少く今は貴いものであるが、源次春が釋教和歌註の序に説を立ててゐるやうに、佛教と和歌とに關し何等かの説をも述べてないのは多少物足りない感がする。その門人有賀長伯の以教齋聞書にも多少その説が見えてゐる。寶永七年七十五で歿した。

有賀長伯は京都の人で、家は世々醫を業としてゐたが、箕裘の業を繼ぐことを好まないで、父兄の制止もきかず、『ことばの葉草につくしても見む』の一首を詠じ、京都を去つて平間長雅の門に入り、

和歌を修めた。後浪速に移つて二條派の歌風を民間に弘布するに努めた。貞享三年師の勸によつて世々の古歌を撰んで景と名所とを配し詠方に便よき一書を板行した。これは即ち和歌世々の栞である。長伯はその後斯道の教科書や参考書を數多く公にし、貝原益軒が幾多の平易な教訓書を出し、廣く國民を教化したやうに、通俗的の著書により汎く國民に歌の指導をなした。よしその作物には斬新な見がなくても、元祿時代から幕府の季世にかけて斯界に遊ぶ幾萬の人に幾何の裨益を與へたかは量り知れないものがある。今その著作について一斑を述べて見る。

(一) 初學和歌式 七卷 元祿九年初版

卷一には題詠の法二十條を示し、卷二より卷四に亘りて四季戀雜の讀み方を詳にし、卷五の終には名所を詠むことを述べ、卷六には本歌取並に兼題當座のことを擧げ、以下には三代集の詞寄を載せ、その中の句がいろは順に列ねてある。

(二) 濱の眞砂 二卷 元祿十年板

四季戀の各題の詠方を示し、題毎に數多の詞を寄せたもの。

(三) 和歌八重垣

一から三までは去嫌、歌詞、題の歌、詞書の歌、てには、返歌、熟字等を記し、四より終

まで詞をいろは順に列ねて註を加へてある。

(四) 歌枕秋の寢覺 三卷

歌枕となるべき名所を、山嶺谷杣阪洞等六十部門に分ち、所屬の國を知るやうにし、所々證歌も出してある。明和八年板は三卷、文政九年版は二卷となつてゐる。

(五) 歌林雜木抄 八卷 元祿九年板

萬葉時代より足利の末にかけて、諸集から、四季戀の一ふしある歌を抜き、題の終に類語を載せてある。

(六) 和歌分類 七卷 元祿十一年板

天象地儀居所草木生類器財人倫等の部に分けて、その中に屬するものの證歌を擧げてある。

(七) 和歌籠の塵 三卷 寛政十二年版

會席用に充てる爲に、題を設けて詞を集め、證歌を二首づつあげ、よみ合せる名所を附記してある。

以上の七書は有賀家の七部書といつて芭蕉及其の門下の俳諧七部抄と對してゐる。この七書を見ると、まづ例歌を示し、所要の詞を連ね、景物と名所とを擧げて、これらを組合せるを要諦として

ゐたやうだ。その歌を見るにも、一方では四季景物の順により、一方には事項によりて見出すといふやり方で、極めて器械的であるが初學のものが何れの道からでも取りつかれるやうに編述の順序方法を考へ、引例は極めて豊富にした點などがいかにも親切であるので普く世に行はれたのである。その子孫は彼地で歌道の宗匠となつた。次にその略系圖を載せる。

長伯——長因——長收——長隣

元文二年 安永七年 文政元年 明治三十九年
歿七十七 歿六十七 歿六十九 歿八十九

その門下には、辻經長・加藤景範・川井立牧・有賀長因などが最も著れてゐる。

辻經長は京都の人、玄風軒と號した。歌の風體詠方等についてその師長伯と問答した書がある。これを以て玄問答といふ。その他秀歌之大略私註三冊を著した。

加藤景範は大阪の人で竹里と號した。その父信成は烏丸光榮卿に従ふことが年久しく、師説を録して聽玉集を著した。景範は家學も受けたが主として長伯の教を奉じ、初學の爲に小さい歌學書を作つた。安永二年に上板した名所ついまつ一卷は秋の寢覺の拔書のやうなもので、享和三年に出来た濱づとは天象歳時方位等に分けて歌詞と作例とを擧げたもの、寛政元年に成つた和歌虛詞考二冊は勅詞副詞の類をいろは順に列ね、註を加へ證歌を擧げたもの。寛政十年に上木したみやびこと玉か

づらは所要の枕詞や序詞を引くやうにした折本である。享和元年に出版の國雅管窺一卷は箇條を立てて詠方を簡明に記したもので景範の著としては最も整つたものである。寶政八年七十七で歿した。元來漢學者で歌を詠じた人は少くない。中江藤樹・伊藤仁齋・熊澤蕃山・雨森芳洲・五井持軒等いづれも集があるが、併し歌學書は別に遺してゐない。ひとり筑前の碩學員原益軒は一の歌學書を著した。益軒は師承は明かでないが、當流の説を奉じた一人である。その文集中に

『和歌者我國俗之所宜、而詞意易通曉。故古人之歌詠極精絕矣。我邦只可下以和歌述其志、述其情、不_レ要作拙詩以招診癡符之誦。』

と論じ、又文訓の中にも『歌は志を養ふ道なり』などと説いてゐる。益軒は藝術の爲といふ考はなくて、修養の具として和歌を見てゐたのである。濃厚で謙讓な性格は歌學の上にも思ひきつた意見を立てない。分けて專攻した學問でないから『官學の傳を得ずして妄に詠めば、詞のつづきも古の言葉にあらず、てにをほも法に違ひ、一首の心聞えざれば和歌とはいひがたし』といつて、二條派の埒外には一步も出なかつた。併し古來の歌書を汎く見て諸説を抄出し、和歌紀聞抄を著した。この書は篇を歌書・萬葉・古今・歌人・歌話・歌詞・訓法・假字・法式・作法の十門に分け、附録として拾遺、連歌の二篇を加へてゐる。あまり自説は無いが首尾整つたものである。

第二十五 堂上派の破壊

元和僣武以降打續く泰平の餘澤で、公卿や僧侶外に士民の間にも學問に従事するものが漸次多くなつて來た。そうして印刷が盛んになつて、古書が容易く手に入るやうになつた結果、師承傳授に頼らないで典籍に親しむやうになり、不完全ながらも自由討究を志すものが漸次増して來た。この精神が上下に充滿して、ここに文學の復興期を現出し、五代將軍の貞享元祿時代に至つて春風一たび訪れて百花爛發の盛觀を呈した。即ち儒學では伊藤仁齋が起つて古義學派を開き、荻生徂徠は古文辭派を唱へ、小説には井原西鶴が出て、戯曲には近松巢林子があらはれ、俳諧には芭蕉が起り、各々一生面を開くといふ盛時を現出した。和歌は格式を重んじ保守を尙ぶ禁裏堂上の翫ぶところであつたから、他の學問や藝術よりは少し後れる所があつたが、是も同一の革新の氣分が終に起らずに止まなかつた。而してこれが實行を奏するには、まづ舊慣又は舊法の打破を要する。墜道を作るにまづダイナマイトや鑿岩機で岩石を壊し、それから棟瓦を組立てるのだ。所謂破壊は建設に先つのである。この破壊の陳吳となつたのは圓珠庵契沖と戸田茂睡とである。

(一) 定家卿の假名遣の攻撃

契沖は眞言の僧、俗姓は下川氏、夙く高野に登り長谷に赴き室生に到り諸行を修し、又河内の延命寺の淨嚴に就いて悉曇を學び、梵語と五十音との關係を考へ、下河邊長流を友とし記紀萬葉を講究し、定家の假名遣に對して疑問を發し汎く古典に見えたる材料を拾蒐して、元祿六年和字正濫抄を著し、從來の音の輕重四聲などによる語勢的假名遣を斥けた。然し從來歌神の如く崇敬して措かなかつた定家卿の説をもどき假名文字遣の攻撃を聞いては自ら蟲のをさまらぬものも出て、橘成員は同九年和字古今通例全書を著してこれに報いるところがあつた。契沖は更に筆を呵し和字通妨抄を出して痛く反對説を攻撃し、竟に歴史的假名遣の記念塔を建てるに至つた。契沖は元祿十四年に六十二歳にして歿した。

(二) 隱家茂睡の獅子吼

茂睡は狷介の士、一たび士籍を離れて後は淺草の金龍寺畔に住んで著作を事とし、本郷丸山町に移つて、隠れ家と號してゐた。始め堂上派の歌書を繕き、或は宗匠家の添削を受けて制詞の不法を痛感し、寛文五年三十七歳の春一篇の宣言文を綴つた。その中に『歌は大和言の葉なれば人のいふ詞を歌に詠まずといふ事なし』といひ『いづれの頃よりか歌の詞に制といふことを書出して、小點の詞、主ある詞、よむまじき詞、揆慮すべき詞、定家卿の不庶幾と宣ひし詞、にくしといふ詞、い

としからずといふ詞、と詞に多く關を据ゑて、人の赴きがたきやうに道を狭くする事は歌の零廢すべきはしなるべし』と慨歎した。一體歌道に傳授秘事を斥けたことは茂睡に始まつたのではなく、夙く足利氏時代に今川了俊なども言つてゐる。徳川時代に於ても木瀬三之や下河邊長流もさういつてゐるが、彌介な茂睡はまだ恭光と名のつた時代から強調してこれを述べた。堂上の歌學で三部抄の羽翼として尊重し來つた百人一首や伊勢物語などの註釋のこじつけの頗る多いのを見て憤慨し之を道破しようと企て、元祿五年にまづ百人一首雜談を著した。その發端にこの撰が定家卿の深意に基つくやうに説き做す堂上派の説を一蹴した。この『百人一首と新勅撰は二條家の歌の體骨肉なり』と書いてあるのは講釋の材料とし師弟の契約の媒にする爲『諸人に深く思はせん爲の僻言だ』と云つてのけてゐる。

元祿十年僻言調を著した。これは古歌の註釋に杜撰なものが多いので、それを正したものである。流布本の袖中抄・幽齋聞書・古今集相傳・三部抄・秀歌之大略・色葉集その他歌合の判等に摩訶不可思議の註釋のあるを見出し批難してゐる。一體古今切紙傳授には表裏の説などを立て、文學上に見えた表の説以外によそへたものがあると裏の説を無理にくつつけたものが多い。傳授などに囚はれない茂睡はさういふ説を根柢から覆してゐる。而して二條派には極力反對し、六條家の爲に回護の筆

を揮つてゐる。袖中抄の流布本には顯昭の説を世に用ひさせない爲に二條家の末流の人が書き加へたところがあるとさへ證例を擧げて論じて居る。又後深草龜山兩皇の後、兩宗迭立の爲二條派と京極派と對抗したことを詳説し、京極派に十二分の同情を捧げてゐる。是も詞に關を据ゑる二條派を嫌ふ精神から來つてゐるところが少くない。先師の説として『爲兼卿の歌を傷ひ破らむ爲に、先祖の俊成定家を本に立てて、その流をつぎその道を學ぶものの、かやう成事をよむべきにあらずと様々の制をいはれし事なり』といひ『制といひ好み讀むまじきといひ、俊成定家の嫌はれ申と言ふ詞ども、大方玉葉集の歌にあり。悪しき詞をわざわざ撰じ入られたるにはあらず、玉葉を誹り傷はむ爲にいひ出したる事にか』と擧げてゐる。是は一隻眼を有した説である。茂睡が先師の説を假りて自説を述べたものか、もしそうでないならば茂睡の就いて學んだ人は傳統に囚はれない達識の士であらねばならぬ。茂睡が教を乞うたといふ竹内三位や從兄の山名義豊などとは全く異なつた別人であらねばならぬ。茂睡が詞の自由を主張する念は極めて強いもので、この書中にも『新しき事、珍しき詞、耳にたつ詞を除きて、三代集より始め新續古今まで續きたる詞をやうやう求め、三十一字を作りて讀みたるといはんと思へば、右の制の詞あるとて取りあげられもせぬは、愚かなる我等如きものは歌の道はおもひ止まりぬべし』といつてゐる。

その翌十一年更に梨本集五卷を著し（同十三年板行）二條家の歌學が歌人を桎梏することを斥け之に向つて鐵鎚を下さうとした。そうしてその發端に寛文五年の宣言書の文句を揚げて、歌語の自由を絶叫した。『人のいふ程の詞を歌によまれずといふことなし』といひ、詞に多く關をすゑて人の赴きがたきやうに道を狭くするは以ての外』との言は彼の常に繰返すところであつた。この書には更に秩序を立て、次の五項に分けて、詳細に意見を披瀝してゐる。

(一) 初五文字に置くべからずといふ詞（ほい／＼と月やあらぬの類）

(二) 終にいふまじきといふ詞（遠山の松、夕暮の山の類）

(三) 遠慮すべきといふ詞（あたらよの。短夜の類）

(四) ぬしある詞

(五) 詠むまじきといふ詞

(一) に就きて。古歌を擧げて斯かる規則のあるべきものでないことを力説し特に定家や貫之の歌を引證し、定家と同時代で名聲が互に相匹敵してゐた家隆の歌には制の定めを云はず、獨り定家の歌にそれを設けるのは、定家を人丸・業平・貫之に比べて貴んでゐる二條家の私事であると斷言し、定家は元來倖運の歌人であつて實際はさほど偉くない。同時の名人が大方死んで後に一人残り、

尋いでその子孫がこの道を繼承したので、上古中古にもない名人のやうに崇められ、その作といへば、まづい意味の聞えない歌でも理窟をつけて秀逸のやうにいひなすのであるとさへいつてゐる。

(二)に就きて。(二)に列擧した詞は京極派にて選んだ玉葉風雅の全集に多く見えた詞であつて之が制を立てたのは爲兼一派の勢力を抑へる爲に特に定めたものである。抑も俊成より定家、爲家三代の宗匠の風體ははや詠み古して了つて、詞の置き換へや、雜を戀に、春の歌を秋に詠みかへる位では一向に面白くないので、爲兼卿が制詞を置かず、歌道を廣めたのに、そうなつては二條家の教がすたるといふので、定家の名を借つて色々のことを作り出し、僻案抄・鶴本・鷺本などの偽書まで作つたものだ。併し真相はいつまでも掩ふ譯にはゆかぬ。當流で尊んでゐる三部抄の中の百人一首も雨中吟もやがて偽書にきまるであらうといつてゐる。節用集でさへも定家の作だといふやうに、定家宗の盛な時に、大膽に痛快にその意見を發表してゐる。

(三)に就きて。その時、その折、その席に臨み、事に斟酌を要すべきことはあつても、詞に之が制を立てるのは僻事である。何でも遠慮々々といつて行くならば、終には蟲や鳥の鳴くのを忌々しくいふやうになる。これは宜しく迷信を抑へなければならぬと論じてゐる。

(四)に就きて。主ある詞といふのは、近世の人の詠んで面白い句をすぐ眞似るはよくないとす

るは不都合である。宗匠家の擧げたる詞は主に新古今ことに定家の作に就いていつてあるが、元暦の始から今日まで四百九十餘年たつた後にまで、昔の詞をつかはれないといへば頗る窮屈になつて普通ていへば、一語で済むべきことも、これらの制の爲に冗長になると慨歎した。

(五)に就きて。此處で擧げた例は、六條家の風を破らうとして誣ひたことが多い。俊成が甘い物が嫌で、定家が赤い色が好かなかつたから、後の歌人も同じやうにしなればならないといつたら、歌の正義正道は立たなくなつてしまふ。定家の詠歌大概に詞は篤きを以て先とせよとあるのにその中に讀まれない詞が多くては、何によつて新しい歌がよまれるかと皮肉をいつてゐる。

要するに、二條家の歌は琵琶鞠琴揚弓の類で、月見遊山翫水の風流の遊び物にするに過ぎない。古今傳授の裏の説といふものは曲つた尺を直なる木に宛て、この木は曲がつてゐるといふ類で、この邪道の闢を壞たなければ、武人でも町人百姓でも墨染の出家でも、この道に志すものを、正道に導くことは難事である。數百年の昔六條京極各一派を抑へるが爲に、定家の末流である二條家に於いて決めた規則で、今を律するのは不都合千萬であると云つてゐる。

此の如く觸るる所の物を薙ぎ倒さねば止まぬといふやうな堂々たる論にも拘らず、梨本集に對して一向に反響のなかつたのは甚だ不思議である。その言が奇矯と見られたか、或は當然すぎると考へ

られたか。吾人はそれよりも茂睡が江戸にゐて浪々の生活を送り、京都の宗匠家やその流れの人との交渉が少く且梨本集の出版部数が極めて僅かて人々の目にあまり觸れなかつた爲と信する。當時江戸は政治の中心ではあつたが、その頃文藝の中心はまだ京都大阪地方にあつて、烏丸光廣卿が鈴木重矩に答へた状中にも『江戸などよりの御詠草は云々、點一首なりとも多き様にと存事候。先方でも多きを御悦のやうに候』と評し去つた如く、當時の江戸歌人の内幕は自覺もない哀れなものであつただらうと思はれる。『熊にもあらず、虎にもあらず、淺草におきふす我をたれか知るべき』と自ら諺つてゐたやうに、茂睡は鷄群の一鶴であつたが、當時はなほよくその才學を認められなかつたであらう。難波の中川昌房が梨本集を評して『歌道復古の學の龜鑑云々』と評し、伴蒿蹊は茂睡を以て歌道に古學を稱へた魁と稱賛してゐるのは蓋し溢美ではない。茂睡は顯正よりも破邪の方に長じてゐた。その放つた強弩は終には酬いられずには止まなかつた。(寶永三年七十八歳で歿した。)

第二十六 古學派 (その一) 下河邊長流と契沖

茂睡や契沖の先輩で古典並に國歌に對する趣味が遠く、悠悠としその研究に従事してゐたのは下

河邊長流である。彼は大和の宇陀に生れ、難波に住み、契沖と兄弟の交を結んで互に切磋琢磨してゐた。茂暉や契沖のやうに堂上派に向つて敢て弓を彎くことはしなかつたが宗匠家の説に拘束されず、斯道に於て秘傳口訣などはつまらないものだとの考を抱持してゐた。尤もその著書に就いていへば堂上派と新しい地下派との橋渡しの地位に立つてゐたやうにも見える。寛文十年に著した枕詞燭明抄は三條西實隆公の書かれた枕詞に基き、それが説明を増補集大したものである。貞享元年に著した緞歌林良材抄二卷は一條禪閣の良材抄に續けて由緒ある歌を抜いて釋したものである。これらの企ては堂上家に學んだ人々の業と別に異つたところはない。併し萬葉管見抄を見ると傳統的の解釋に囚はれないで自由討究の精神が十分に溢れてゐる。又寛文十年に撰んだ林葉累塵集十卷の序の冒頭に『大和歌はおほよそ我が國民の思をのぶることの業なれば、上は宮柱高き雲居の庭より下は芦葺の小屋のすみかに至るまで、人を分かず所を擇ばず、見る物によせ聞くものにつけて、皆その志をいふこととなむ。』と提唱してゐる。この國民の思をのぶるの一句は實に和歌を特殊の人々の專有と見做さない新しい意義の閃めきを示してゐる。そして此の集には『位なき武士の八十氏を始めとして、或は市に荷ふ商人、あるは山田に作る農夫、或は樹の下岩の上にありか定めぬ桑門の言の葉に、さるべき一節縮れるをば之を尋ね求む』といつてゐるやうに、中流以下の人々の作物を集

めたもので、眼を民衆の上に置いたのが洵に嬉しい感がある。併し堂上派に反抗する意味で撰んだと見るは妥當を缺いてゐよう。けれども和歌は段々に下々にも廣くよまれるやうになつた傾向が斯ういふ集を促し、またこの集が民衆の歌を奨励促進することにもなつたであらう。之に次いで延寶六年に同じ方針を以て萍水和歌集二十卷を撰んだ。これが動機となり爾來續々と民間で私選集を出す傾向を來した。素より人によつて採擇の上にも差等はあるが、天和二年に河瀬菅雄は麓の塵を編み、清水宗川が正木葛を選み、尋いで戸田茂睡は和歌鳥の跡を出し、了壽は新歌さざれ石を出し、それから阪靜山・京極高門・松宮俊仍など續々とその跡を襲ぐ人が澤山になつた。長流は水戸黃門光圀卿が禮を厚くして招いたのに應せず、纔に萬葉の註釋を作することを諾したのも、狷介不羈の性とばかりでなく、飽くまでも民間の歌人として立ちたいといふ希望も手傳つた爲てはあるまいか。併し長流の志を繼いだ契沖は、光圀卿の爲に萬葉代匠記五十三卷を著し、またその餘材を以て古今餘材抄を選んだ。その他紀記の歌を釋して厚顔抄を著し、百人一首改觀抄を出した。これら註釋の業は北村季吟などと同じ仕事のやうであるが、季吟は在來の諸説を集め擧げる方で、いはば堂上派の註釋に總決算をつけたものと觀るべく、契沖のは飽くまでも自由討究の態度で、古書を註し新しい意見を立ててゐる。古今六帖の考證でも勝地吐懐篇でも皆それぞれ一見識があつて、すべて古典を

研究するものは契沖の研究を見逃す譯にゆかぬ。實に契沖は古學の鼻祖である。併し歌學としては別に新意見を發表してゐない。隨筆河社の中には古歌と今歌とを繪畫に比較した條もあり。宋詩が唐詩に劣る所以を説いて和歌に及んだ點もある。詠歌の爲に枕詞使用の便を謀らうとして著した詞草探抄の如きもあるが、伴蒿蹊が『歌を以て師を論ずるは師を知るものにあらず』と評したやうに自家建立の歌學はない。兩嶺子には『杜預に左傳の辯があり。契沖には萬葉の辯がある』と見えてゐるが實に契沖は萬葉に遠い研究をしてゐた。随つてその門人にもその研究に力を盡したものが多い。今井似閑は萬葉緯二十卷を選び、海北若沖は萬葉類林十五卷、萬葉師說五十一卷、萬葉作主履歷九卷を著し、野田忠肅は萬葉五句類句十二卷、萬葉類礎三卷を著したのはその衣鉢を受けたものである。

第二十七 古學派 (その二) 荷田春滿

契沖に繼いで古學を唱導した人は荷田春滿である。春滿は伏見の稻荷の詞官信詮の二男で、幼少の時から家學を傳へ、國史(六國史)律令・有職・故實の學を修め、又冷泉爲綱(?)に歌學を受け

元祿十年妙法院宮堯延親王の歌道の師を仰付かつたが、王室が衰へ典禮がすたり、國學が振はないのを慨いて、之を挽回せんと志し、遂に仕を辭して江戸に遊學した。けれども關東には師とすべき人がないので獨り研習し、又契沖の著書を愛讀した。山城稻荷の荷田家には代匠記を抄録した萬葉講本が二十六冊（尙殘缺）もある。春滿が三たび目に江戸に出た時には、その才名が既に世に著れてゐたから、幕臣は八代將軍の命を奉じて國典を尋ねに來るといふ始末で、大に柳營の覺えもあつたので、享保十三年には國學校を京都伏見の間に設けるといふ建議をして、幕府でも嘉納されたが、元文元年にその設立を見ないで六十八歳で歿した。その創學校啓は立論正大で、滔々千數百言頗る壯んなものである。その文體が絢爛で花に過ぎてゐるから、平田派の人々が建議の旨趣を取つて後に選文したなどいふ説もあるやうであるが、自分どもは春滿の作に疑ないと考へて居る。その中には六百年このかた國學が講ぜられなくて、神の教は年々にすたり、國學の學問は昔のあと形がないくらゐになり、律令法典の書はなくなり、詠歌の道が荒れはてたことを慨してゐる。即ち

在_二我神皇之教_一、陵夷一年甚_二於一年_一、國家之學廢墜存_二十一於千百_一、格律之書泯滅、復古之學誰云問。詠歌之道敗闕、大雅之風何能舊。今之談_二神道者_一、是皆陰陽五行家之說、世之講_二詠歌者_一大率圓頓四教儀之解、非_二唐宋諸儒之糟粕_一、胎金兩部之餘瀝、非_二鑿窟鑽穴之妄說_一、無證

不稽之私言、曰秘曰訣、古賢之真傳何有。或蘊或奧、今人之偽造是多。

と氏の國學では國史、律令、和歌を教ふる考で、それには古語の研究が本であると思惟してゐた。是は契沖から導かれたのである。即ち『古語不_レ通、則古義不_レ明焉。古義不_レ明、則古學不_レ復焉』といつてゐる。この三分科の中和歌は萬葉及古今を教へるを第一としてゐた。その理由として『萬葉者國風純粹、學_レ焉則無_二面牆_一之譏_一。古今集者詠歌精選、不_レ知有_二無言之誠_一。』といつてゐる。氏の歌に關する考はこれに籠つてゐる。即ち上代の復古にあるのだ。仁齋が漢學に復古を唱へ、徂徠が漢學に古文辭説を唱へたと同じ行き方である。尙門人に常に云ひ聞かせてゐたといふ。『學びの道は天が下の大路なれば、己れ一人立てたらむがごとく誇るべからず。學ぶ人も師の教なりとてあながちに泥むべからず。皇御國の書見む人はまづ漢籍をよみて事を辨へ、しぐれふる奈良の林に分け入り、神代の宮木ひき、千代の古道跡をとめつつ益荒雄心をおふしてて、高き代を慕はば、などか昔の手振に至らざるべき。歌も然り。』(春葉集の序)との言は現代に満足せずして、その憧憬してゐる古道にゆく道筋を示してゐる。又中世以來歌が淫靡に流れて戀の媒となつてゐるのを慨して、一生戀歌を詠まなかつたといふことで、若し當座に奇戀の題でも採るときは、之を雜の歌に詠んだとのことだ。彼の寄虎戀を『仇むくうおもひ巴提便にたぐへては虎もつたなきものところを見れ』と詠んだのは名

高い話である。戀歌をよまないといふ考は同時に出た三輪執齋も主張した。題詠が起つて和歌が衰へたとか、抄物のやうなことをして歌の心を説かうとするのは、眞に歌を知らぬ人のすることだなどといふ説は、徂徠もその隨筆『なるべし』の中にいつてゐるが、春滿も『古は眞心もて思をのみ述べればおのづから直かりしに、題をとりて詠めるより詞をかざり心をさへ巧に作れば、苦しげなるもかつがつ見ゆるぞかし』といつてゐる。古に復る自然に歸るといふことは已に當時の新しい氣分であつたのである。明治四十二年であつたと記憶する。私は稻荷に到り荷田家の書籍を一見したがその時に歌に關した書きものの澤山残つてゐるのに驚かされたのである。左にその主なるものを擧げて見やう。

萬葉集童蒙抄

四十二冊

これは八十卷あつたといふ傳であるが、同家にあるのは萬葉集二の卷から十七の卷まで四十六冊しか無い。

萬葉集童子問

四冊

仙覺抄に據つて疑問を列擧し、そし解答を附した草稿で、萬葉二の卷の一部と三の卷三冊とて、あとは缺本である。

萬葉集和假名訓 七册

萬葉の七、九、十、十一、十二、十三の六卷に就て訓方を書いたり、又釋をつけたもので、寶永中の作と見える。これも殘缺て名前はまだ信盛といつた時代のものである。

萬葉集歌人錄 一册

萬集中の歌人をぬいたもので、寶永よりは後、享保十年よりは前の作で、東麿と署名してある。

萬葉集註抄 一册

本集の名稱や選集の時代に關する問答を記してある。

萬葉集改訓抄 三册

東麿といつた時代のもので、本集の四、十、十二、十三、の卷ばかりある。他は存してゐない。

萬葉集問答抄 五册

仙覺抄・宗祇註・見安・拾穗抄・代匠記等に據つて問答の事項を抄録したものであるが同じく殘缺である。

これらの大部分は片成のもので、その上殘缺であるから、その學說としては今どれだけとはつき

りは云へないが、何にしろ、萬葉に就て隨分心をこめてゐたことが分る。その他

古今和歌集割記 三册

本集の名稱、巻頭の歌のこと、詠人知らずのこと、隔句の歌以下常陸帯の歌まであつて他は缺けてゐる。東萬侶といつた時代のものである。

古今和歌六帖考 三册

歌の出所を書いたもので、東麿といつた時代のもの。

百人一首發起傳 三册

本集の由來から説き起して歌の解釋に及んでゐる。

伊勢物語童子問 六册

幽齋の關疑抄に據つて、問答體を用ひて疑義を解いてゐる。

以上の如き自筆本が澤山存してゐる。春滿がいかに古歌の解釋に勉めたかが分る。併し春滿は偏狹な學者では無かつたらしい。復古學の精神は旺盛で一々之を實現しやうとしてゐるが、また古今傳授といふことも他の懇請によつて行つた一例がある。享保十一年五十一歳の時、出羽の能代の人村井政方の爲に、東常縁の傳を頼常といふ人が傳へて抄を作つたものを、全部二十六册自ら筆を染

め狀を具して送つてゐる。その二十六冊といふのは本集の註が二十冊、その他には口訣書一冊、口訣見聞一冊、古今安秘抄一冊、見聞愚記一冊、三部書口傳一冊、和歌十體一冊、である。この春滿の自筆本は明治十五年政方の子孫から帝室に獻納して今は圖書寮の御本となつてゐる。併しこれは宗匠家が行つた傳授とは一つなみに見る譯には行かぬものかも知れぬ。彼の戸田茂暉が革新の急先鋒でありながら、懷紙短冊作法などのことは門人にも傳授してゐるのと同様のことと考へられる。それは兎もあれ、春滿が出て契沖の唱へた古學は國學の名によつて段々上下に注目されるやうになり、その養子の在滿や門人の眞淵に因つていよいよ盛になつて來たのである。

第二十八 德川中期に於ける堂上派

古學復興時代からその植立時代の間に於ける堂上派の歌人歌學者はいかにと見るに、時世につれて堂上にも數多の人材が出た。即ち中院通茂及清水谷實業卿などは既に他界されたが、武者小路實陰烏丸光榮を中心とし、尋いで冷泉爲村・日野資枝・芝山持豊があらはれ、その門に教を請うた地下人も少くなかつた。

(二) 武者小路實陰及其の門流

實陰卿は當時の堂上歌人の筆頭である。懿元法皇は逍遙院以來第一の歌人と仰せられ、和歌の德によつて家の例もにらぬ儀同三司の地位に進んだとさへ云はれてゐる。その歌學上の著述には初學考鑑(一冊)がある。又門人似雲の聞書せる詞林拾葉がある。併し堂上家のこととて、歌は上手ても歌學は當流以外には出ない。定家の毎月抄と詠歌大概とを金科玉條とし、『詞は舊きを以て情を新しくせよとの一語、徹上徹下の語ならむ』(考鑑)といひ、また『總體新しく今の世に詠まんと思ふは僻事なり。古より幾らの人の詠み出て來りし歌なれば、總體新しきことはよまれず、只風體を新しくすべし。只一字二字にて一首新しくなるものなり』(拾葉)と保守主義の裏書をしてゐる。併し考鑑の始に當流の由つて來る所を説き、又その規範とすべき學書を擧げてゐるあたりは、さすがに二條派の精神を十分明示してゐる。又詠歌の爲に修養の必要を説くことが甚だこまやかである。歌を正しく學ぶは恰も家を作るやうなもので、まづ地搗きを善くし、地ならしを能く整へ、材木を寄せ、指圖を漸々仕立てるやうにしなければならぬ。それには心の修養が第一で、平生の注意が肝要であるとし、『歌人の常の心得、春秋の感は勿論、朝夕の鐘の音までも曉と夜とはかはるものなり。況して四季のうつり變ること、心をつくれれば明白きことぞかし。その味をよくよく合點して歌をよま

ば感情深き歌も出て來べし』(考鑑)といひ、又歌を慰の爲の藝と思ふのは短見て、『儒釋神道も歌道に籠れり』(拾遺)と説いてゐる。蓋し和歌の本意であつて、大學にも誠意の極は治國平天下であると思へ、意を誠にするは和歌に過ぎたるはないとの考から説を立てたのである。随つて歌に實情を尙び、『歌は實情なくては中々詠みがたし。随分信心にならるべし』(拾葉)といひ、昔から和歌の道を祈るに如意輪觀世音を信する習がある。貫之の初瀬詣はそれである。又眞實に心掛けるときは禪宗に頓悟といふことがあるやうに、一時にあまりへ出たやうに心の開けることがあるといひ、又歌の席に臨みて無念無相なるべきことを教へてゐる。即ち『いかにも無心體になるべし。心は明鏡の如し。それに用意すれば鏡に塵をためて色像をうつすに似たり。何にても題の意さはりなく移らず。只無心無象にして題を取りよむべし。』(拾葉)といひ、草庵集を揚げて、『無味かろき所にえもいはれぬ面白味あり』といひ、門人似雲の力味ある歌を制し、ひたすら冲淡にして餘情あるやうにと勧めた。當時歌は優美高尚のものと限られてゐて、今の如く人生をさながら歌ふといふことは庶幾しなかつた。従つて心は一つでも俗情と世智とは區別すべしとの意見であつた。即ち『心は二つなきとはいへども、歌詠むには、今日の俗情世智とは一向に場所違ひたるものなり。皆人それにて直ぐによまうとするゆゑに詠めぬなり。詠み出してその姿甚だ賤しきなり。とかく歌は優美至極

のものなれば、心をのどやかにおとなしく、閑雅にもたずしてよまれぬなり。』(拾葉)と説いた。併し俗情と世智とは離れても餘りに自然をまげて作り立てするのは善くない。草木の屈曲正立さまざまあつても共に天地自然の正理で、蠢駝師の枝を採めたり、曲げたりするのは、不自然であるとしてゐた。即ち『屈曲正立天理のままなる所を詠じ出すが歌の正理なり。無心にて題をとり屈曲正立は時にとり、模様自然の理に任すべし。正立に屈曲あり、屈曲に正立あり。屈曲になるをいやとて、無理に正立にするは却つて屈曲なり。屈曲に向きたるは自然に屈曲に詠ずるは曲即ち正立なり。曲立二ならず、天地自然なり。』(拾葉)と説いてゐる。この自然を尙ぶとの考は洵に近代的である。唯草庵集に固執しやさばみたる風ばかりを重んじたのは堂上派の缺點であるといはねばならぬ。實陰は超岳院と號した。その子公野その孫實岳相繼いで歌の師と仰かれた。公野の歌の意見は詞林拾詠に少しく載つてゐるが、多くは父の説に據つてゐる。

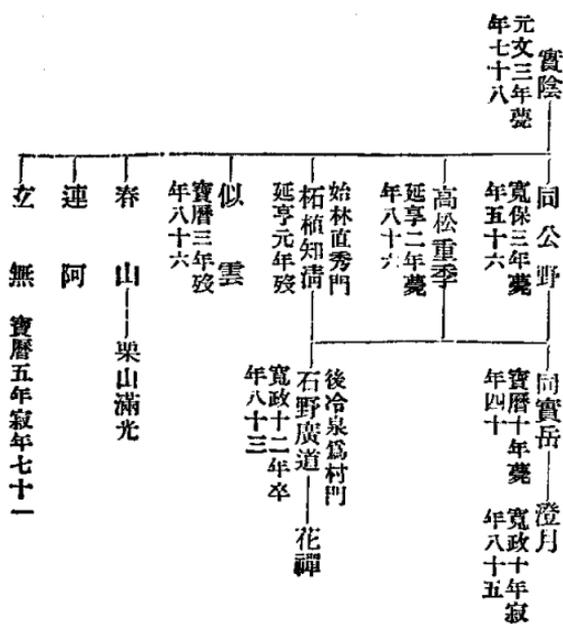
『歌よむには、いかにも心をくつろげて何となくゆたかに持つべし。』

『内心に何ぞ逼るか、又は氣遣はしきことあれば、その物ごしもそのやうに聞ゆるなり。歌も亦かくの如し。』

『心をもあまり制しすぎる時は却て悪しくなるやうに覚え候。人は小天地なり。天を見心得べし。』

一口の間に始終なきことなし。』

公野の弟で高松家を襲いだ重季も歌人であつた。その歌における意見は詠歌金玉論に一篇載つてゐる。次にその門流を擧げる。



年並草の作者似雲は正徳三年から享保六年まで實陰卿に就いて親しくその教を受け、師説を聞書にした。それが詞林拾葉二卷である。享和元年に刊行した磯の浪はその拔萃である。述懐百首の中に咲き匂ふ言葉の花もあだなれや、心をたねのまことならずば

言の葉はただをさなくておのづから深き色香をいかですゑまし

一ふしと思ふ心のなかなかに色香もきゆる人のことこの葉

などの詠がある。師説をさながら奉體した徴と見える。

同門の柘植知清は岡の舎と稱し大番の士であつた。かたいと及濱木綿の著作がある。かたいとは勅選集の中類想の歌を四部に分けて集めたもの、濱木綿は勅選集中同じ歌を二集に載せた例を集めたものである。この他酒井忠軌は詠方心得極秘一冊を著し、堺の百華庵春山は梁塵愚案抄註を書き、その門人栗山滿光は和歌道しるべを出した。實岳卿の門人澄月が事は後に述べる。

(二) 烏丸光榮及其の門流

實陰卿よりは後輩であるが、烏丸内大臣光榮公は當時今人麿の稱があつて(風のしがらみ)詠歌に巧みて而も歌の添削に於ては當世第一と呼ばれてゐた。その歌學書として廣く用ひられたものは謠詠覺悟抄である。この書は一名を和歌教訓十五條ともいひ、當流に於ける歌學の綱領を一つ書に

擧げたものである。その條項中主要なるものは次のやうである。

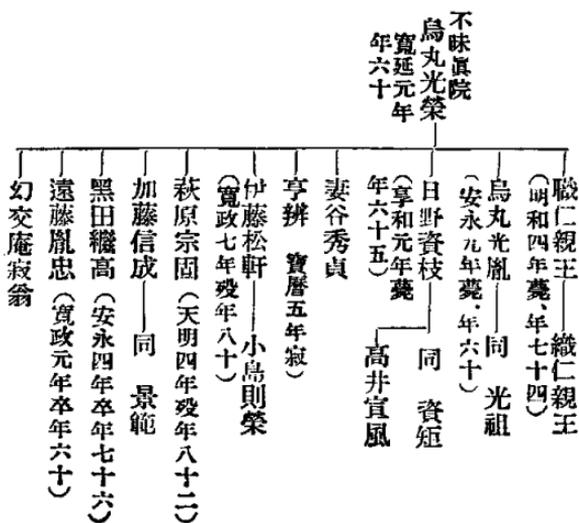
- 一、歌道以實爲專要義常々忘却有るべからざる事
- 一、京極黃門三部抄仰ぎて信じ深く思ふべし
- 一、制詞先達加難詞等能々覺悟すべし
- 一、稽古の最初、風體安らかに、よく聞ゆるやうにと心をひき具して習練第一の事
- 一、初心の間早險最も宜しからず

これは綱領書で、いはば啓蒙的のものであるが公の心をこめた歌學書は元文二年十二月敍覽に供した内裏進上之一卷である。その中に歌道の尊むべきことを切言し、近代人の信心も執心も深からぬことを慨し、詠歌大概を評して字々金、古今これを規矩とすといつてある。又詠歌法に關しては『凡そ詠み方の教唯一つなり。一は心の眞實なり。思ふ所のまことを云ひ述ふるより外のことなし。意をのぶるは實意、景をいひのぶるは實景にして、毫末も實に背けば歌整はず。古今の秀歌唯この實のみなり。』といつてある。以實爲專といひ實意實景を離れては歌がととのはないとするところが歌の新しい生命がある。この精神は武者小路實陰の説に合致してゐる。公は本來才の人であつて、その榮葉集を見ても實に氣のきいた佳作が多い。嘗て超岳公に歌の批評を乞はれた時、實陰卿は『御

器用故に御歌しつとりせぬ所御座候」と答へたといふことである。光榮はその言に感激して斯く實意實景を旨と説くに至つたやうである。松平筑前守に送る書にも「名聞利用に囚れず、まづ道は崇敬を本とすといひ、詠方の教は心の眞實唯一なり」と同説を述べてゐる。詠歌金玉論所載の消息の中にも「歌は心に誠さへあらば、その心の誠が外に現はれて歌は出て来るなり」とも、「平生口上にはあらはしていふことを後から見れば皆歌の管なり」とさへ教へてゐる。この考は後のただごと派に共通する點が多い。而して門人加藤信成の録した請辭玉話や妻谷秀貞井上信當の筆記や詠歌金玉論中の説を見ても、一方には堂上の習氣と他方には新時代の影響とが相雜つて幾らか折衷主義に傾いてゐるやうに思はれる。即ち詠歌大概を規矩とし新勅選を軌範としてゐると同時に「古ばかりを行ひては行はれず、今かばりをいひては古の規矩廢す、古今を斟酌せねば何事も行はれぬなり」といひ、古歌を見るにも抄物を見又人に尋ねると早く會得は出來ても、いつまでも我物とならず、時々工夫して自得することの必要なる所以を説き、又「随分勉めよ。その中に自然の歌があり」といつてゐる。自然の歌とは何であるかは詳に説いてないが、實情實景を諳つたものに外ならぬやうである。そうして之が稽古には心と所作との一致を要とし、「我が所作より心高く候へば、進み過して不叶道候。又我が所作より心緩く候へば、怠じて不叶道也。守中敬道何とぞ誠に叶へとのみ存

候が第一に候」と述べてゐる。次に神儒佛三教と歌との關係に就きては他の堂上諸家の説の如く共に合致すべきものと思惟し、『心を明かにして疑惑を破るは佛心家の開悟に過ぎたるはなし』とも、『參禪工夫の開悟の人は心明かなる故に歌も自ら明かなり』と和歌の爲に禪の必要なる所以を説き、次に儒教に就ては『孔孟の教また歌道修練の上に一々に叶ふなり。随分孔孟の道を心に掛くべし。』とも『論語を會得するが歌には第一によきなり』とも云つてある。神道との關係に於ては單に『歌は神代の道なれば神道を崇敬せずしては叶はざるなり。是れ歌の根本なり』と説くだけで、國民の信仰とその情操を吟哦した作品との關係に就ては別に説くところがない。次に工夫向上の方に就きては、眞摯・辨識・習練の三つが必要であると説き、『和歌は好むばかりにては上達せぬなり。崇敬するが第一なり』といひ、又『我心を懇にもてば自ら作意も懇なり。さればとて主命父命朋友の約等すべての事に大に轉重あり。四季の時運、山海景氣等一樣ならず。唯一轍に心得たるは愚かなる事なり。』と論じ、次に『心ばかりを沙汰したる分にては歌あがる事なし。歌をよくととのふやうに幾度も詠まざればあがる道なし。』などと説いてある。又學書に關しては『初心稽古歌の手本には新勅選宜しく候。正路令_二修行_一人、初心の間雪玉さへ最初には見せず候。拾遺愚草は熟覽吟味のことも修行純熟の上にて免_レ候事に候。』と説いてある。初心と純熟とて學書を異にするのは當然であるが實

情實景を重んじながら、萬葉に溯らないで、定家宗で止まつてゐるのは傳統に囚れてゐる弊である。蓋し堂上派では止むを得なかつたことであらう。左にその門流を擧げる。



光榮の衣鉢を傳へたのは末子資枝である。資枝は日野家を襲いだ。兄烏丸光胤が櫻町天皇の勅を奉じ、歌合目錄の作成に着手し、病に罹つて他界したので、その志を繼いで五年の星霜を重ねて歌合目錄四卷を作る。六百番歌合並に千五百歌合の判詞中歌學に關繫ある語句三百二十九條を抜き、これによりて歌、作者、勝負、判の全文を容易く檢出するに便あるものとした。これより先靈元天皇の作例抄に擧げさせられたものは二百五十九條であつたが七十條多いのである。尤も作例抄は殆ど世に知られない御本であるから、資枝は新に稿を立てたものと思はれる。中古に於ける歌の批判にこの二つの大きな歌合の判詞が永く權威のあることはいふまでもなく、これが檢出に便利のものとなつたのはその力である。資枝は關白近衛内前公の爲に安永七年詠歌一體備忘を作り、これを奉つた。この書は二條爲家の原作に父不昧眞院の遺訓を記入し、更に野江問答、作例初學考並に桃蕊御集秀葉集榮葉集より例を抜き完結せるもので、堂上制禁の書といひながら、この方面のものとして整へるものと謂つて宜しい。又和歌聞書といふ一本があつて後水尾院靈元院及五世の祖瑞巖公の歌學説をぬいた一書がある。又その著の伊勢名勝志を見ても種々の書を参考してある。歌學には關繫ないが鼈頭草庵集の著もある。斬新なものはないが當流の書を眞面目に研究したことが分る。

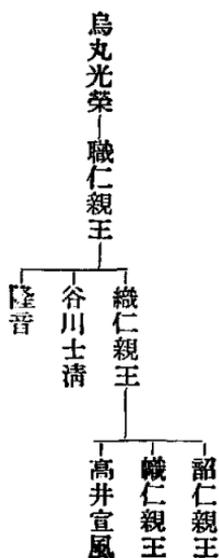
不昧眞院の門人は極めて多かつた。日蓮宗の僧に亨辨といふものがあつた。芝の櫻田町の長享

寺に住んでゐて習古庵ともいひ、遁危子とも號してゐた。和歌童翫抄を著し、手爾波や假名遣を歌によりて記誦することを示し詞の解釋を試みたり、又松井幸隆の著を讀みて六窓塵談評をつくり、結題五百首を集め、又烏丸資慶、清水谷實業、中院通村、日野弘資、烏丸光榮諸卿及松井幸隆の説を引いて再治視聽筆削を著し、詠方學書等に就きて辯ずるところがある。大阪の醫者加藤信成は公の教を受けたことが五年、その説を録したものに聽玉集がある。妻谷光貞及井上信當の筆録したのもある。幻交庵寂翁には和歌大意の著がある。筑前侯黒田繼高、三上侯遠藤胤忠もその教を受けた。殊に胤忠は東野州の後を承けた家柄であるところから、光榮公教訓十五ヶ條を増補して當家歌道教訓二十五條を制してゐる。和歌叢林夜話などを著した松山圓應も光榮卿に關繫があるのではないかと想はれる。公及其の嗣光胤及資枝卿に従つてゐた倚翠庵主伊東松軒が門人小島則榮は當時の公卿の歌論を集めて詠歌金玉論を著した。則榮は通稱七右衛門といひ大番の與力にて號を桂山といつた。

附 有栖川宮家の歌學

靈元天皇の皇子で有栖川宮家を御相續遊ばされた職仁親王は父御門の風を承けて和歌を御嗜みあらせられ、殊に烏丸光榮卿の教を受けて御自身にも種々の歌書をお著しになつた。桃園天皇に奉られた和歌系統がある。そして御家の風は冷泉家の風とは多少趣を異にせることを述べ、次に四季各

題の詠むべき要を御説きになつた作歌書がある。後昆の爲に御遺しになつた愚考一步抄には堂上家の説の如く和歌と三教との一致を説き、特に佛道は色欲を戒め無常を樂しむが故に歌の修養上特に大切な所以を述べられてある。又詠歌覺悟といふ一本がある。中書王織仁親王の奥書によれば、烏丸光榮、中院通茂、飛鳥井雅章の三卿に諮はせられて手爾波の用法を考へ、又制詞、先達加雜語、不庶幾詞、近代斟酌詞、遠忌詞を集め、いろは順に引くやうに一種の禁忌語の字引のやうなものさへお作りになつた。織仁親王の著にも詠歌論の一篇があつて、詠歌大概の歌と百人一首の歌とは撰出の目的の異なること、百人一首は意深き歌を詮とし、詠歌大概の歌は風體を詮にして、前者は骨の如く後者は肉の如し。この二つを兼ねたるは秀逸なりと説かせられてゐる。その他詠歌大概毎月抄以下榮雅の和歌入學抄に至る學書を類聚した類聚詠歌抄や和歌題留等の書があるが、それらは織仁親王の時に成つたものかと思はれる。



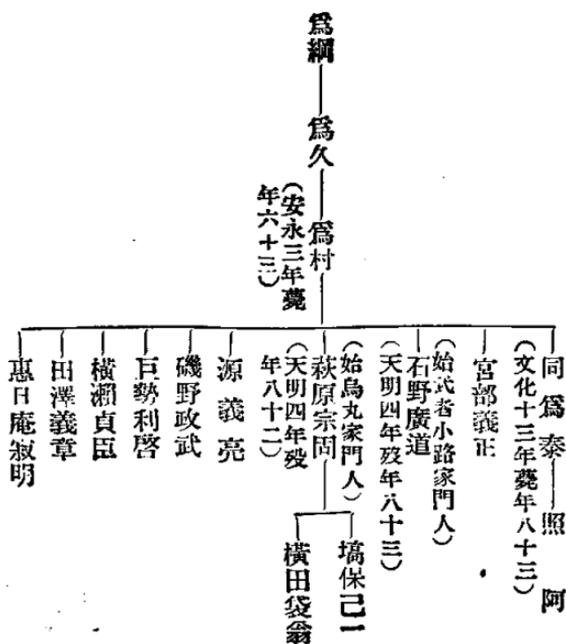
(三) 冷泉爲村及其の門人

冷泉家の歌風が二條家のそれとは多少趣を異にしてゐたことは既に述べて置いたが、堂上の公卿が悉く皇室より古今の傳授を受け、又歌書の勅講を拜聞しなどするに及んで相互の間も段々相近づいて來た。冷泉中納言爲綱は幼にして父に先だたれたので中院通茂の指導を受け、その子爲久は庭訓を傳へたが、その孫爲村は應元法皇より古今の御傳授を受け、和歌は鳥丸光榮に添削を請うた。斯ういふ有様で懷紙短冊の書様など儀式等に關する事の外は諸家の説が一層隔たりのないやうになつた。權大納言民部卿爲村は天分鶴かに修業を重ねて冷泉家の中興と稱へられた人で、その風を慕ひ教を乞ふものが頗る多く『予が代になりていづれの國にも弟子なきところは候はぬ程に』と自らも云はれた程である。併し自ら筆をとつて著された學書は花郭公月雪物語一名樵夫問答ぐらゐである。この書は嵯峨の山里の樵夫と老翁との問答によそへて、四季の景物の代表たる花郭公月雪の歌を詠んだことを作物語のやうに書いてある。多分明和二年頃の作であらう。その中に、『五の常を離れず、時の間も神代の道を忘れず、心を玉津島江の浪に磨き、言葉に住の江の松の色に習ひ、和歌の浦の汀になれて、高角山の高き光を尊み仰ぐべきは此歌の道なる』といつてある如く、儒教や神道を歌の修養に結び付けて考へるところは他の宗匠家も毫も變らないが、人麿や赤人を最高の標的にしたとこ

ろには萬葉研究が盛んになつた時世の反映と見做される。尤もその自記されたところに據れば、若年の時、住吉明神が馬に召されて我が門に入られる靈夢を見たり、玉津島の縁日に蜘蛛の絲が衣の袖にかかつた夢を見たことがあり、特に柿木人麿に關しては著しい感應があつた所から、柿の木で人麿の尊像百體を作つて知人に頒つたといふ程であるから、斯ういふ信念を發表したものであらう。

自然の風物を念頭に置き古代を懽悦するを要としたことは『常に四つの時の景氣を心にこめ、起臥に古を慕ひ、起居に身の愚かさを思はば自ら直き姿ともなり侍らん』と述べてあるので分る。而して歌の本原は誠の一字にあると考へ、『物を深く思ふ誠至らざばいかてその風情を求めむ』といひ、又道と誠と戀歌との關係を説いて、『心は道にして道は人なり。心のもとに誠にして誠の本は心なり。萬の道誠に洩れたるはなし。中にも此道は神世の優れたるをつぎて、誠ある世々の教畏し。今いふは愚なり。戀の道も亦この道の外ならず。』といつてある。循環的な表現で徹底してゐないが、戀と誠と道との一致を認めてゐたやうだ。又その理想の歌體に關しては『己が心より觀念し出して、實意實景より風情を得て、詞續き優美に、心新しく、たけもある歌の直に聞ゆるを正風と申すにて候』(義正聞書)といひ、詠作に際しては三昧に入るが如く餘念なきことを力説した。そうして常住坐臥歌とリズムを合せるやうな態度を執つた。兼題を試作するに方り他より言を懸けられても返事

もしないくらの歌三昧に入る習慣であつたといふことである。冷泉家の書は門外に出さない風になつてゐるので、自分どもの眼に觸れない他の書があるのかも知らぬが、恐らくは作の人であつて、學の人ではなかつたと思はれる。その門人の主なもの及その末流を擧げる。



高崎侯の舊臣で、妻女及其の子義彦と共に澄覺公爲村の教を受けた官部義正（寛政四年歿六十）が歌學上の不審を質したものに義正問書が一卷ある。二條冷泉派の差別、冷泉家代々の宗匠のことより始めて同門の人々の消息、當時著名の歌人に對する師家の批評並に懷紙短冊歌會の事を聞書にしたもので、冷泉家のことを知るには便あるものである。義正は又師説に基いて出爾葉要解二卷を著した。中に二條家などで行つてゐるかな留りつつ留りなどの傳授は冷泉家では別に掟のないことを注意してあるが、尙二條冷泉兩派の關繫は研究の餘地がある。

幕臣で冷泉家の教を請うた人々は餘程の數に上るであらう。霞關集作者部類に擧げてある中より拔書したものでも頗る多いものである。高家衆の横瀬侍從貞臣、側衆の巨勢大和守利啓、御書物奉行の成島和鼎、寄合衆の磯野丹波守政武、御普請奉行石野遠江守廣道等枚舉するに追のないぐらゐである。これらの人々は父子妻女等皆その門に入るといふ狀況であつた。中にも石野廣道は學者としても群をぬいてゐた。歌には關繫がないがその著憲法部類の如きも立派なものである。冷泉家から授かつた歌學のことは妹婿の小野高濤に贈つた泉石抄の如き備忘録に過ぎない。月性院 僧止に爲村卿の肖像を書いて貰つてその影前で追慕の會を起したり、又師家の詠作を類聚したり、近世の江戸の歌人百八十八人の作千二百餘首をぬきて霞關集を撰んだり、古集より忠孝若道恩愛の歌をぬきて澤水

を撰んだり、古今の序に基き和歌の徳を動天地、感鬼神、和夫婦、化人倫の諸門に分けて古今の例話を集めて和歌感應抄を著すが如き、歌の上にも拮据せるところ少からず、歌學上の隨筆として大澤隨筆及蹄溪隨筆が貴いものである。大澤隨筆は赤阪溜池の畔にゐた頃のもので、柘植知蒔、津金胤臣、宮部義正、萩原宗岡、阪昌周、笹本忠省、仁木充長、松平義堯等の先輩友人の歌學説を照會し、或は古歌の打聽それに對する自家の所見を述べ、或は諸書よりの抄録を載せ、或は人の問に答へたものを録し、或は誦詠すべき古歌出詠歌の諸體等を雜載してあるが、その博洽觀るべきものが少くない。蹄溪隨筆は麴町の清水谷に移つて後の隨筆で前書の續篇とも見るべく、大澤文稿にも歌道に關したことが多い。これら隨筆や文稿には歌學上のまとまつたものはないが、和歌史の資料として又當時の歌壇の消息を見るには貴いものである。連歌師の系を書いたものもある。假字遣に關したのものもある。又重言や類似の言葉て使用を異にするものを集めたよしありごともある。古集の注釋を試みたり、勅選作者部類を校定したり、長い生活の間に種々のものに手を着けてあるが、打つて一丸となし、立派に自家の見識でまとめた歌學書を建立するには至らなかつたのである。

廣道に亞いて斯壇に推されてゐた幕臣の歌人に萩原貞辰がある。貞辰は百花庵と號し入道して宗岡と稱した。始め烏丸光榮の門に入り後武者小路家に贅を執り、後冷泉家の弟子となつた。光榮卿

の教を録した麓の指折がある、これに爲村卿の誤を書き加へたものを山路の花と名づけてあるが、その説は小島則榮の集めた詠歌金玉論に載せてあるものと大同小異で格別に變つたものはない。その隨筆一葉抄がある。當時の人の名吟を始め和歌史の資料となるものがあるが歌學として纏まつたものはない。その他御小姓の松平義亮は武者小路實陰卿に就てゐた時代に國風隨といふものを書いてゐるが、これは懷紙短冊歌會等に關し師家説を録したものに過ぎない。爲村卿に従つて後百首臆斷や石の上を著した。石上は杜詞を釋したものであるが、これには古學派の影響を受けてゐる。磯野政武に和歌山路の指折の作があるが、これも啓蒙的のものである。尙阿闍梨法印惠日寂明（文化二年寂）は天明二年歌道根元問答二卷を著し、眞言の教理に附會して歌の語源や歌道の意義を説いた。これも牽強の説が多い。（古學派に對し鄰女晤言を著した平安和歌四天皇の一人慈延並にたゞごとを唱へた小野蘆庵も爲村卿に學んだが、この二人のことは後に説く。）

（四） 姉小路芝山等諸家及其の門人

姉小路家には足利時代の季世に基綱濟繼といふ人が出て父子共に歌を詠み相當立派な集を遺してゐる。當時歌人や連教師の間には弓爾波の沙汰をことごとしくいふ傾向を生じて姉小路家にては傳といふものが行はれた。これは誰の手に整理されたか明かでないが、主なる條項を十三ヶ條に分け

ててにはの使用法を説いてある。この書が増訂されて歌道秘藏録となり、細川幽齋と烏丸光廣の手を経て春樹顯秘抄となつた。そのかみは歌の想とか内容とかいふことよりも、手出葉のかゝりとかおさへなどいふことを八釜しく云ひ出した。このかゝり及おさへといふは後の係結法に當るもので、今日よりいへば文法に關することが多い。この書と本居宣長の語學上の研究との間には密接な關繋がある。

姉小路家は一時中絶し徳川時代に再興した。元祿の頃に公量といふ人があつた。その子實紀は、歌を好み風竹亭自嘯翁と號し、享保二十年風竹亭和歌讀方を著し、風體・知題・その他制詞に關し會式書式等當流傳來の説を述べ、またその説を抄きて竹亭和歌式を著した。これは公宴の式に倣つて當世に用ふべきうちこの歌會のことを説いたもので、諸家にても參考されたやうだ。又別に和歌用心之事といふ一書を著し、歌よむ心得を説いた。又門人の筆録せるものには、詠方に關する注意を録した姉小路家和歌傳書などがある。

芝山家は勸修寺家の支流であるが、その五代目の持豊が堂上歌人として知られてゐる。持豊の父重豊、祖父重豊の歌學説は桂樹歌話にも少しは載つてゐる。

宣豐——定豐——廣豐——重豐——多田義俊——持豐——深田正韶
元祿三年薨 寶永四年薨 享保八年薨 明和三年薨 寬延三年歿 文化十二年薨
七十九 七十 六十四 五十 年十三 七十四

重豐の説に『當時朝廷の和歌風體、新拾遺以後の風體にて、先は新後拾遺の體を自當にして詠むことなり。然るに地下の歌よみと號するもの、和歌に時代あることを知らずして、作例をのみとりて詠む故、當時の風體に叶はず。』と説いてゐる。和歌に時代の變遷を述べるのはよいが、その標準があまりに低い。その門人には多田義俊が著はれ、持豐卿の門人には深田正韶が優れてゐる。持豐の説は正韶に答へた學書で窺はれる。從來公卿の間には民間學者の歌學書は御自分は勿論門人にも公には川ひさせなかつたものであるが、持豐は本居宣長の説を喜び、門人がその書を繙いたり、その講義を聞いたりするのを禁じないのみならず、むしろ勧めた方である。これは堂上家が時世に目覺めた一つの例である。義俊は元來神典及故實などを修めた雜學者で南嶺と號した。芝山重豐武小路實陰を始め堂上家の人々の歌談を集めたものに桂樹歌話がある。この書は名賢和歌秘説、秋齋歌話、南嶺和歌物語など表題が種々になつてある。古歌の見やう句のかへり方などにつき多少取るべき説もあるが特に言ふべきこともない。歌道傳授の書には桂花抄が三卷あつて、和歌正風體の傳以下二十四條に亘りて説いてある。古歌鑑賞の傳がある、古歌を見るに五つの標準を立ててある。

第一、序歌 上に序をおいて下に題意をあらはすもの。

第二、次第歌 初句よりすらすらと續けたるもの。

第三、發歌 初句に呼出して切り、二句より詠み出したるもの。

第四、三發歌 二句で切り、更に三句より詠み出したるもの。

第五、間句歌 二三の句より轉じたもの。

幼稚な分類であるが、句切によつて歌を分けやうとした點が取りどころであらう。その土金傳など
和歌を神道に附會した説は吉田流の神道の糟粕を嘗めたもので、寂明が眞言の數理にひきつけたの
は擇ばない。堂上家の門人にも神道を學んだ人の歌話は夙い時代の人々よりもその説が固陋である。
深田正韶は香實と號し尾藩の儒者で尾張志の編者である。宗匠家に従つて、詠草詞書の書方、歌
の學書、加難詞、聲調のことなどを聞書にし、又詠歌聲調極秘之傳といふ一書を傳へてゐる。聲調
に關する考は民間では賀茂眞淵などが唱へたが、堂上の流を酌むものに於ても、時世につれてこ
に言及した。或は聲音の昇降といひ、耳のひびきといひ、舌の活らきなど、多少その方の問題には
觸れてゐるが、未だ明確の説を立てるには至らなかつた。

第二十九 漢學者の見たる歌學說とその反駁

漢學者で和歌に對して意見を抱いてゐたものも全くないのではない。貝原益軒は詩よりも國風を貴んだが、その濃厚篤實の性は既にも説いたやうに別に異を立てず、二條派の説を奉じてゐた。一世の俊豪で古文辭學派を主張した物徂徠は、詩歌は和漢同趣との意見をもつてゐた。太宰春臺の獨語の中に先師は『異國と我邦と風俗大に異なる中に、唯詩と歌との道ばかり、詞の異なるのみにてその趣全く同じ。人情同じき故なり。』と言はれたとか、また『和歌は人丸赤人の外業平を上手とすべし。』と説いたと記してある。流石に眼は高い。南留倍志の中にも抄物のやうなる事をして歌の心を説かうとするは歌を知らぬ人のすることであるとか、題詠が起つて和歌が衰へたといふ説も擧げてある。併しいづれも断片的なものである。

太宰春臺（延享四年歿す年六十八）の意見は獨語の中に見えてゐる。双親の感化によりて彼は幼時より歌を詠んでゐたが、當時は堂上家に就かねば名を成すことが難く、よし又名を成しても終始その下風に立たねばならない時世と觀じ、歌を捨てて詩を學んだ。随つて詩を視る眼で歌を見た。師説を受けて詩歌同趣説を執つた。そうしてその師が古文辭學派を唱へて漢學上に一種の復古説を

立てたやうに和歌の道に復古説を唱へた。その時代の標準は萬葉古今の昔である。當流て尊んでゐる新勅選集などは彼の眼中には殆ど問題にしなかつた。堂上派て神様の如くに敬まつてゐる定家卿は、歌を盛にしたのではなく、むしろ衰へさしたと思惟してゐた。その後を受けた爲家卿は父よりも一層劣つてゐる。然るに世人はその教を尊んで金科玉條としてゐるのは歌道の一大災厄であると斷言してゐる。これは唯感情の上からではない。漢詩の變遷を和歌に推し當て比較研究の結論として生じたのである。まづ大體に就きて『萬葉集の歌は風雅より漢魏の古詩までを兼ねて稍盛唐の詩をはらめるものなり。古今の集は正しく盛唐の詩なり。後撰拾遺の二集は盛唐の詩を交へたるものなり。後拾遺より新古今までは中唐の詩を交へたるものなり。新勅撰より下つ方はいふに足らず。』といふが如き比較をなし更に説明を下してゐる。その中主要なる點は唐詩の極惡道たる白樂天の詩が我邦に行はれ、その風調を和歌に移されてから三代集の體が失はれた。又支那では宋時代に至り程朱の道學が興つて物が理窟ほくなつて詩の道が衰へたやうに、我邦では俊成定家の歌道が行はれて萬葉や古今の風體が衰へた。俊成卿は天台の佛法を學んで一心三觀の理を歌道の極意とせられ、その子定家卿も家訓を受けたが、詠み出された歌が理窟くさくなつたと云ふことである。この比較には議すべきところもあらうが、兎に角一隻眼を具へてゐたことは分る。斯ういふ考から茂睡契沖

の著書は見たかどうかわからないが、堂上派の攻撃をした。春臺は世人が公卿の弟子となつて、歌の添削を乞ふのを非難し、自家の詩の道を公卿に説いてその迷夢を覺すことを希つてゐた。即ち『公家の人々和歌の道を古に復すべきことを思はずして、五百年來定家卿の教を守り、道の衰へゆくことを知らず、至りて歎かはしきことなり。』と絶叫してゐる。その意氣や盛なりと謂ふべしだ。そうした日頃萬葉集から三代集までを千遍反覆して讀めば、大抵暗誦が出来る。この暗誦によつて古歌の風調を曉り、その暇には諸家の歌學書を繕き歌の法も承知しおいて、人情感興の事あるときに詠むが宜しい。と歌人の修養法を説いてゐる。この復古説は堂上派に對する一つの攻撃であるが、當時堂上派からは別に反駁も出なかつた。その後に至り古學派の承繼者たる本居内遠が、まだ濱田孝國といつた時代に獨語辨を著し、春台の誤を正さうとしたことがある。その書は春臺の歿後八十二年を経た文政十一年に成つてゐる。春台在世の當時誰かが批評を書き春台がこれに應答したならばさぞ學界を賑はしたことであらう。併しこの獨語辨も希觀の書である。今これを引いて見る。その枝葉論はさて置き、第一にその根本義たる詩歌同趣説に對し、大に反對意見を述べてゐる。即ち詩と歌とは『大凡は似て全く同じからず。似たる所はうはべにて、似ぬところは骨なり。』といひ、又人情は萬國同一なるも風俗は國によつて違ふ。従つて心も詞も變つてゆくのは自然の勢であると

し、相互の比較をなして次のやうに論じてゐる。「皇國の古、直き心に思ふ程を有のままに詠み出づるは實情にて、聊も僞れることなく、世々を経て詞巧にかはりゆけども、皆そのもとの實情を學び習ひてよむ故に、いつまでもその形は失せずして今に至れり。唐土は古より人の心あしく、唯何事もうはべをつくろひ飾れる心にて變化はやく輕薄にて直からぬ風俗なり。この性情をもて作り出す詩なれば、性情ながらに詐り飾り多く、その情と思へるものも、うはべを詐り飾ることの恒に心に離れねば、自ら詩にもつくろひ飾る所多し。それを世の移りゆくままに巧にいひもてゆけば、愈々僞りかざりのみ多く成りゆくぞかし。是情を述ぶることは同じけれども、その情もとよりの性のまにあらざれば、用ふる人の心用ゆる國のならばしによりた遣ひさまが違ふ故なり。」云々と。眞淵宣長以來國學者は漢意を排する傾向が盛になつて來た。孝國もその説の影響を受けたのであるが、一國の文藝と世界の文藝とはお互に類似の點を認めると共に、又相互の間に著しい差別を否む譯にはゆかぬ。同じ題を繪に書いても、その用ふる筆や繪具に由て差異があるばかりでなく、同じ器具材料を用ひても筆者の個性によつて差別がある。従つて同趣説で押し通す譯にもゆかない。孝國は詩を見る眼で歌を見るのは全く同意出來ないのであつた。

第二に唐詩と和歌選集との比較論的を外れてゐる。特に後拾遺集より新古今集までを一つに束

ねて説くのは大雜把の考で、時代の推當こそは出來やうが、元來性質の異ふものに就て、風體を比するの誤である。特に新古今を排したり俊成や定家を貶したのは、よく歌を知らないものと評してゐる。第三に時世によりて風體のかはるは詞の變遷に基くといふ説を反駁し、歌の風體の變るは詞によらず、時々の人情の緩急や時勢によるといひ、第四に後世の歌のむづかしくなつたと非難した説に對しては、古今の變革を知らないものと斥け、次の如くその理由を説いてゐる『昔はすなほにて、人の詠み古さぬ所多く、安くして趣を得たりしも、世々を考てはいつもその境をのみ守りて珍しげなければ、一ふし珍しからんとすればむづかしく、くはしき境にも考へいるは自らの變革なり。』と、この他題詠の始まつてより虚偽の詞があるといふ春臺の説を駁してゐる。

第三十 古學派 (その三) 荷田在滿と國歌八論

隱家の茂隆に依つて撞かれた鐘は、歌壇に大きな響を起すべくして而も一向に手應へが無かつた。春臺が獨語の中に叩いた柏子木はどこまで聞えたか、全く分らないが、寛保の始に至り、荷田の在滿が放つた彈丸は斯界に大な震動を與へた。この彈丸は即ち國歌八論である。

荷田在滿は通稱を東之進と呼び、叔父春滿の教を受け有職故實に委しく、歌道にも優れてゐた。學を以て田安悠然公に仕へてゐたが、大嘗會便蒙板行一件により、朝家の壓迫を受けて不遇に終つた。歌道に於て夙くより堂上派に慊らなかつた。併しその意見を發表したのは寛保元年のことで、悠然公から歌學に關する意見を徵せられた時、三日の間に認めて奉つたのが國歌八論である。所謂八論とは歌源論・翫歌論・擇詞論・避詞論・正過論・官家論・古學論・準則論の八つである。茂睡の梨本集は當流に於ける破壊の一面ばかりであつたが、在滿のは建設の方面にも説き及んである。

破邪の方面から説くのは、在滿の志でないかも知らぬが、まづ官家論に就て見るに、當時堂上家が地下を見ることは良民の賤民を見るよりも甚だしく、歌は堂上のよむもので地下の知るべからざるものと稱し、歌の當然の理を論ぜず、調の緩急ばかりを八釜しくいひたて、偶々力ある歌を見ては、これは地下風である、俳諧である。眞の歌でないといつてしまふ。自家の拙ない歌に似ないかといつて斯の如き妄評を下すのは甚だ不當であると論じてゐる。又古學論中にも世の歌人が聖の如く尊信してゐる定家卿は假名遣を間違へ、古歌や古意を解しそこなつてゐて、正しく歌學を得た人とは思はれない。又近世古今傳授といふことをむづかしげにいづてゐるが、それも古學をしないからである。一體書を解するには書を以て相照し、まゝ發明を加ふるの外はないものである。古今集

は一つの選詠の集である。別に言外の意義を存して作るべき道理がないといつてこれを斥け、又避詞論中には制詞の絶對に必要でないことを痛論してゐる。

次に顯正の方面を考ふるに、在滿はまづ歌の本體に就て一種の見解を懷いてゐる。氏は堂上歌人が金科玉號としてゐる古今集の序をさほど有難いものと思惟してゐない。否その所説を誤謬と見做してゐた。氏は食はず嫌ひでない。古今の序はよく讀んで細かに研究したものだ、古今左註論も著した程である。併しその冒頭にある『心に思ふことを見るもの聞くものにつけていひ出せるなり』とばかりでは言ひ盡してない。歌の本源とは聲にあげて謡つたもので、反言すれば言葉を永くして心をやるものである。今の言ていへば古の歌は耳に聞くべきもので、實に音楽と離れないのである。我邦でも漢國でも歌は謠ふものであるといふのが彼の持論であつた。そうして之が例證を和漢に互りて擧げてゐる。處がその後國歌に一大變遷を來した。それは謡つて耳に訴ふるより書いて目に訴へるやうになつた。支邦では毛詩がやうやく變じて唐詩となつた。我邦では少し後れてこの様子をみて、詩に準じて詞華言葉を窺ひ、その詞がやうやく華にうつるやうになつた。耳より目に訴へるやうになつた。今の言葉でいつて見れば、音楽的から繪畫的に變つたのである。音楽的であつた時には唯句調の整ふか整はないかといふことを旨としてゐたが、繪畫的になつて來てからは、その優

劣といふことが段々論ぜられるやうになり、風姿の幽艶なものとか、意味の深遠なものとか、景色の見るが如きものとか、或は難き題をよく詠みこなしたとか、或は連続の巧などといふやうな點を考慮して優劣を定めるやうになつたと説いてゐる。(この所論中歌源及歌の變遷に關し唐土の文學と對照した所は、春臺の説に胚胎してゐるやうに思はれる。)

次に和歌の功驗に關しても、古今の序に云つてある所を否認し、支那文學に御定まりの治化の具となす説を執らないで、『歌のものたる六藝の類にあらざれば、もとより天下の政務に益なく、又日用常行にも助くる所なし。』と斷言してゐる。此考は當時にありては實に破天荒である。併し少し云ひ過ぎた感じもする。そこで大菅公圭などは『荷田千は國史の大本を知らず、道を知らざるの妄語を吐けり』と排斥した程である。然らば歌は何の爲に翫ぶかといふに、在滿は繪家が畫をかくやうに、一つの娛樂として、又學者は國粹を愛てる心から嗜むべきものであるとしてゐる。斯ういへば國民的藝術と見做してゐるやうにも見えるが、そこを本來の目的とはしない、もとは性情を吟哦するものであつたが、世の下るに従つてさうは行かなくなつた、却つて技巧をめぐるやうになつた。在滿は便宜主義を執り『暫く歌の本來を捨てて世間と同じやうに詞華言葉を翫ぶに如かず』としてゐた。この立場からして國粹をめるといひながら、眞淵とは違つて上古の詞を用ひて歌を詠むと

いふ説は執らない。古言は磨かれた詞でないから、之を用ふれば風姿が幽艶でないと信じてゐた。即ち『古言はただ質朴なれば、その中に迂遠なる詞、急迫なる詞、細碎なる詞ありてことごとくに用ふれば幽艶ならず。』といつて、萬葉の中皇命の『朝踏ますらむ、その草ふけぬ』の歌も

草深き宇治の大野に駒なめて

朝露ながら踏や分くらむ

と改めて専ら新古今調に詠まうとした、悠然公も眞淵もその説に反對した。同門でありながら在滿と眞淵とが、擇詞の上に反對の方向を取つたのは抑々何に由つたであらう。眞淵は古を學んで之を實行しやうと考へ、在滿は古を學ぶは今を明にする爲て、古を直に今に行ふは善くないとの考を懐いてゐたから、おのづとその差異を來したのであらう。兩人は個性が違ふ。在滿は歴史家で眞淵は詩人であるから、斯の如き相違を來したのは免れなかつたであらう。伴蒿蹊は在滿が萬葉風よりも新古今風を尊んだのは、眞淵が在京の中には近體を思惟してゐたのに、江戸にては萬葉風を唱へ、天下の人が之に風靡したから、それを悪んでこの論を立てたであらうといつてゐるが、これは眞の消息を得たものではあるまい。

次にその標準とし理想とすべき所はいかにといふに、萬葉でなく、古今でもなく、實に新古今集

にあつた。世には新古今は華實兼備といふ人もあるが、その眼から見ると猶實に過ぎて花やかでないといふ感じあつたのである。又新古今は花に過ぎるといふ説もあるが、詞花言葉は花を貴ぶべきものであるから、彼集こそ準則とすべきである。而して人麿赤人や貫之は歌聖であり豪傑であつたが、質が勝つて當代にはふさはない。後京極攝政の歌こそ規範とすべきである。「實に後京極攝政の歌每首皆錦繡、句々悉く金玉、意情を述べれば、直に感慨を起し、景色をいへばまのあたりに見るが如し。風姿幽艶にして力あり、語路逶迤として聊も閑らず。實に詞華言葉の精粹なるものなり。」と多大の賛辭を捧げてゐる。貫之や定家を抑へて後京極を揚げたるは全く新しい考である。

次に歌の風姿は新古今によらば古集の研究は不必要かといふに全く然らず、古歌を解せずしては詠作上『面に墻して立てるが如く』便りのないものと考へてゐた。そうして萬葉を學ばないと歌學とはいはれない。世には貫之及定家を歌學の師と仰いでゐるが、貫之は人麿赤人を同時の人と思つてゐたらしい。長歌と短歌を轉倒してゐる。萬葉集に入らぬ歌を集めるといひながら萬葉の歌を入れてゐると貶し、定家は假名遣を誤つてゐる。又古歌をよく心得ないやうに見えるといつて、六條家の清輔や顯昭を揚げて定家を抑へた。世人が力を古書に用ひてよくその本を辨へることをしない。爲に定家卿などを尊信し、生涯その舊轍を出ることが出来ないとまで言つてある。斯の如く古學を主

張したが眞淵とはその行方を異にしてゐる。この論が一たび出てから田安宗武公を始とし眞淵・公圭・宣長・伴蒿踐その他いろ／＼の人が八釜しい批評を試み、大に斯壇を賑はすに至つた。その反響は至大であつた。

(一) 田安宗武の國歌八論餘言

田安宗武はこの論を読み延享三年之が批評を書いた。それは即ち國歌八論餘言である。侯は歌源・遊詞・正過・官學の諸篇に就ては大體に於てその説を贊してゐるが、在滿が歌は治化日常の助とならないといふ説には強く反對した。侯は在滿のやうに詞花言葉を概ぶといふ藝術的の説はとらないで、古説の如く人の心を和ぐべき道と信じてゐた。さうして歌には理と技との二つがあつて、二つが備らなければ歌道でない。世には技に得て理に足らないものがある。又心正しく理に叶つてゐても技に拙いものがある。共に完いものでない。この二つを得る順序は、まづ歌の理を學び、次にその技を學ぶが善いといつてある。

又歌の標準に就ては、在滿の如く新古今のやうな綯爛を極めたものは欲しない。時代と人物とに拘らず歌の優れてあるを師とすると準則論に述べてあるが、意は萬葉記紀の如き上代の歌にあつた。擇詞論に於ても在滿の説とは全く反對で、古の詞はめでたく、後の詞は多くは拙い。それゆゑ

古言を學ぶ必要は大にあるといひ、併しあまりに詮索探索に汲々たるも眞の歌道でないと言ひ、又時世と歌との關係を考へ、政道の正しい時世は歌の理りが盛んで、政治の衰へた時代は歌も理りも遠つてゆくが、技だけは之と伴はないこともある。歌合が始まつてから歌道が大に廢れたと力説された。又新しい物の名を歌によむ論と歌を嗜む論とを附記し、堂上家のやうに歌題を制限するの愚なることを説き、又歌に耽つて狂氣じみた行をなすのを戒めてある。在滿はこれに對し再論一卷を上つて和歌を教戒の具となす説を承引しなかつた。侯は始は家臣の狛諸成などに聽いて新古今風の歌もよまれたが、段々と復古主義に傾いて、遂には崇古の極にも達した。この餘言を著された時は已に思想の變遷時代であつた。隨つて在滿が古今の序を非難し、後世の技巧一方に流れた時代を尙ぶのが氣に入らなかつた。その考は延享三年に著された歌體約言に徴しても分る。即ち『古今序に倭歌は人の心を種として萬の言葉とぞなれりけると書けるにぞ歌の理りはつきてぞ覺え侍る』と約言の序に述べてゐる。

(二) 賀茂眞淵の批評

眞淵は田安侯に仕へて間もなく八論餘言を示された。これを讀んで意見を奉つたのが八論餘言拾遺である。後これに多少の筆を加へたのが國歌論臆説である。その大體は侯の説に賛意を表してゐる。

るが、歌源論や翫歌論等に於て多少異なつた考を述べてゐる。そこで侯はそれに對して更に意見を述べた。これが國歌臆說剩言である。この剩言に對し眞淵は更に意見を陳じた。これが再奉答金吾君書である。玉函叢說によれば、この書は臆說剩說辨疑ともいつたやうだ。

今相互の説の異つてゐる所を摘まんでみると、歌源論で伊弉那岐伊弉那美二尊の唱和は後人の擬作であらうとの侯の説に對し、眞淵は上世は思ふ志ばかりを短く詠つたものてまがへの作てはなく、且唱和の二字から考へても歌源であると答へ次に翫歌論では和歌は人の心を和ぐる徳はあるが支那詩とは違ひその效が少いといふ侯の説に對し、眞淵は理論ばかりで人は心服させ難くても、歌を川ふれば懐かしがらせることも出来る。又在上の君子がこれによつて下情を知るたよりもなる。人は物欲に掩はれ易いが、歌によつて之を救ふことが出来るその徳をたたへてゐる。再奉答書にて眞淵が古は歌を撰んで教ふることは無かつたが、久米歌や五節舞が始まつて祖先の功をたたへ、禮樂を興して治化に具へむとするといへば、侯は久米歌は支那の雅樂と同列には云はれない。五節はもと淫佚のものであるから廢れた方が却つて結構であると論じ、眞淵は續紀の詔や三善清行の意見封事などを引いて之を駁し、侯が雅樂の效をたたへると、眞淵は我が國人は國風によりて和ぐものであるから雅樂よりも我國の古き歌古き調を貴ぶべきであると答へた。侯は更に歌論一篇を書してこ

れを論じた。同じ復古主義でも宗武侯のは漢學に立脚地を置き、眞淵のは國粹にその基礎を定めて相論じあつた。これも君臣水魚の情合から起つたので、之が爲に双方氣まづいことは無かつた。

序に爰て一言加へて置くことは詩と歌とに關する眞淵の意見である。支那人は梅の如く、我國人は柳の如く性情の遠がある。それが現はれて歌となり詩となるもので、人情の相違から文學の差異が生ずると見てゐたやうだ。随つて徂徠の詩歌同趣説に全く同意してゐなかつたらしい。尤も昔は支那も我邦ももとは實事實情を諳つたが、後には段々と横道に馳せた。支那でも上古の詩は折に付けて思つた志をいひ出したもので實情でないのはなかつたが、宋儒に至つて専ら理をもつて之を説き、偏に勸善懲惡の具となすに至つた。凡そ理は天下の道理でも理ばかりで天下の治まるものでない。ただ道理だけいつても人が感ずるものでない、詞優しく聲あはれに謡ふと、理の外に人の感ずるものであると説いてゐる。

(三) 大菅公圭の國歌八論斥非

大菅公圭は寶曆十一年に國歌八論斥非を著し、漢學的の見地から在滿に反對した。併しこの書の内容は在滿の歿後十年である。氏はまづ歌源論に於て支那では歌といふのは詩の一種であるから、我邦の和歌も國詩と書くのが正しいといひ、上古の歌は悉く諳つたやうに在滿が説いてゐるの

は誤である。大御所の歌及、神樂催馬樂こそ譎つたものであるが他はさうでないと言ひ、又上古の歌の一般に質なのは謠ふを目的として作つた爲だといふ在滿の説を駁して、天下の事、質より文に赴くのは自然の理勢であつて、謠ふと否とに關しない。否謠ふ目的で作つたものはむしろ綺麗であるべきだと駁してゐる。

翫歌論に於ても在滿の説に全く反對し、歌も王道の一端であつて治化の具となり、又日常にも助けになると論じ、次に擇詞論に於ては詩には古詩今體の二様がある。和歌もそのやうに、萬葉は萬葉で古體を存し、古今は古今で近體を示し兩様に詠むが宜しい。萬葉の歌を新古今風に在滿の朱を加へたのは不都合であるといひ、『海内の人を率ゐて國詩を禍せむものはそれただ荷田か』と痛詈した。次に正過論に於ては在滿の當然の理といふものが甚だ覺束ない。その標準は人によつて異り時世によつて變る。換言すれば『言の文質は定準あるにあらず、衆人の好惡に定まる。衆人の好惡も亦定準あるにあらず。時世を以て移る。今の世に居て今の人の當然の理を以て古の人の言を責めんとせば冬月裘を着て夏月の葛を衣るを笑ふが如くならん。』と云ひ、従つて自分は在滿の説によることは出来ない。『假字の誤は萬葉を法として改むべし。風體の過は古今を則として正すべきなり。』といひ、次に官學論に於ては大體は荷田氏の説を賛成してゐるが、尙題詠は決して惡くない。蓋し後の

世は風俗が汚染であるから、たとひ感が心の中に動いてもまづ辭を學ばなくては、之を言葉にあらはすことが出来ない。題詠は辭を學ぶの道であるといつてゐる。上古の歌は造化の花に似て粗て且拙に類してゐるが、その生氣本色天々たるものがある。後世の歌は剪綵の花のやうに巧麗である。けれども斧鑿の痕が存してゐる。然も剪綵もその功が熟するときはいつしか造化に迫るやうになる。題詠は學びのりて誠に近よることが出来るものだといつてゐる。

古學論では在滿の説を是認し、唯貫之を辯護してゐる。最後の準則論に於ては全く在滿と意見を異にし、新古今を斥け古今を尙んでゐる。『即ち新古今は意を構ふことは巧なれども古今の高古に及ばず、辭を撰ぶこと華なれども古今の溫雅に如かず』と評し、又後京極攝政の作に對する在滿の贊辭を中らずとなし、自分は飽くまでも『古今集に香火し、貫之に尸祝し侍らむ』と結んでゐる。公圭の所説は漢風に引かれたところもあるが、好尙が人により時によつて變ることや、剪綵よりも生氣ある歌を庶幾したことや、在滿のやうに消極的に歌を翫ぶ主義を排斥した點は流石に取るべきである。尙氏は古今集序考や古今集略解や歌道隨筆も著したやうであるが管見に觸れない。小倉百首批解四卷伴蒿蹊の批評を書入れた一本が圖書寮に傳つてゐる。田安宗武や眞淵の説を受けて、歌合がいよ／＼盛になつて風雅の趣がいよ／＼衰へたといふ説を述べ、後人が定家家隆を人麿赤人に

比し貫之躬恒に齒するは非事であつて、當時鎌倉右大臣ばかり傑出してゐると説き、又歌書の注解は北村季吟に至つて大成したらしいが、季吟は四書朱註の法を和歌にうつした結果、修理は明かて覽るには便利であるが、一方では宋儒の理學の考に染まつて風雅の意に達しないと評してゐる。この批解は宗祇・幽齋・貞徳・季吟等の説を擧げて、次に今按を加へ面白く批評してある。併し自負に亘るやうな口吻があるので、蒿蹊は『凡評語上來辭氣揚々自負譏_レ他亦如_レ茂卿_レ自不_レ覺_レ其醜_レ田舎翁_レ哉』と評してゐる。公圭は圭とも白圭とも稱した。野公臺に隨ひ襄社に游學した彦根の一學人である。

(四) 本居宣長の國歌八論及斥非評

本居宣長は明和五年國歌八論及同斥非を寫し取つた時短評を加へた。

一、國歌八論に於ては、『歌はざれば心をやるべからず』といふ歌源説を以て卓見とたたへ、甞歌論は後世の歌に拘泥して歌の本分の徳を知らないものと評し、擇詞論中古言を斥けたのは上古の歌の趣を會得しない説といひ、當然の理を以て責るといふ正過論も不可となし、準則論に於ては他の古學者と異なり、新古今集を以て和歌の極致となす意見に同意を表した。但し後京極攝政の歌は誠に絶妙であるが、近代の弊を正さん爲に、定家を貶することの甚だしいのはこれ亦古學の弊である。定

家は歌學はとるに足らないが、歌は古今獨歩であると辯護してある。

二、八論斥非に就ては。歌源論中の歌を國詩と改むる説を難じ、翫歌論にては荷田氏の説も誤あれど、大菅氏は徒に異國の詩の用ばかりを知りて歌のさまを知らず、又時世を知らず、詩の論を以て歌の上を定めたのは大なる誤と論じ、擇詞論並に正過論には自家の主義とし實行してゐるところと合すればその説を賛し、準則論にては古今集の高雅なことは勿論、萬世の準則たることも否まないが、尙近體の極盛は新古今であると主張し、且公圭が後京極を貶しようとして例を引いてゐるがそれも誤なることを説いた。

(五) 伴蒿蹊の國歌八論評

伴蒿蹊も亦八論評を試みた。その大體に於ては賛意を表してゐるが、翫歌論は曲れるを矯めて直きに過ぎると評した。蓋し氏は舊來の歌學者が歌は天地を包羅し、儒道もこれに籠り佛もこれによつて成就すると誇張し、古今の二字には空假中の三締を含むとか、『我衣手は露にぬれつつ』の歌は理世撫民の聖道より出てゐるやうに説きなすのを悪んで説を立てたやうだ。併し、古今の序に述べてあるやうに、歌の徳は大きなものがある。一首の歌でも五倫の不知をも整へたり愚痴なものを發憤せしむる効があるといひ、準則論に於ては、新古今集の面白いことは誰も皆承知のこととて、中にも

後京極攝政が天授の歌才、古今獨歩であることも誤ではないが、歌は誠を以て主とすべきもので、誠は必ず質である。質實でなければ人を感動することが出来ない。詞花言葉ばかりをかざつたものはちよつと人の耳を喜ばせるが實際には感動を與へない。舍人の皇子の薨去を悼んで詠んだ萬葉の

ひんがしのたきの都にさもらへどきのふもけふも召すこともなし

の誄歌と、新古今の哀傷の

なき人の煙となりし夕より名ぞむつましき鹽釜の浦

と比較して見ればよく分るであらう。詞花言葉を翫ぶ弊は流れては徹書記や牡丹花などの異舛にも落ちるやうになる。よし異舛にならぬとも、歌ざまがあしく調がつまりて、眞淵の新學にいつてあるやうに、自然の海山を忘れて狭き庭の假山水を翫ぶやうになる。これは花を茹つて實を忘れる弊であるといつて、この條に於ては在滿の説に反對してゐる。蒿蹊は萬葉研究の必要を認めてゐるが、眞淵一流の如くあまりに古い詞を用ひて歌よむことは賛成しない。一方に偏らず中正を旨とし、花實相備つてゐる古今を準則としてゐた。終に臨みて在滿が八論を書くに至つた裏面の消息を説いてゐるが揣摩の説が勝つてゐるやうに思はれる。

(六) その他の八論に關する批評

以上の外に荒木田久老の國歌八論評がある。藤原維濟の國家八論斥非再評がある。平安逸人精粕子(匿名)の國歌八論排斥通駁がある。久老のは断片的のものである。維濟のは十一ヶ條に分けて可否を論じてある。この他濱田侯松平康定の國歌八論評、小田清雄の國歌八論斥非書書入がある。平悖の歌論類纂、石戸谷昌の國歌論評等新しく出來たものもあるがあまりに冗長になるから茲には略する。要するに八論が一たび出てから、之が批評論難に關するものは十幾部も出た。そうして論戰の最も盛であつたのは既歌準則の二論であつた。在滿が歌徳を低く見たのに對しては立脚地は異にしても大抵は反對した。準則論に於ては、萬葉の古を主張するものと、ふるの中道たる古今を旨とするものと、新古今を尙ぶものと三派鼎立の狀を呈した。堂上派攻撃の官家論の如きはこの上問題にならぬほどに定まつて來たのである。而して從來和歌を以て教化の具のやうに見た説以外に娛樂の爲とか國粹の爲などの新説を翹して世の學海の注意を惹かした。在滿の功はこの學史の上に没してはならない。

第三十一 加藤枝直の歌論

幕臣では賀茂真淵を援助しまたその益をも請うた加藤枝直（天明五年歿す年九十四）は町與力の劇職にありて、深く歌書を究め、真淵の古學派を唱へる前に既に江戸歌壇の一方の雄となつてゐた。武士道の鼓吹者松宮觀山なども互に歌の道を論じ合つた。享保の末頃には不惑の齡を重ねて一家の見を立ててゐた。夙く學んでゐた新古今風を改めて古今の調に移つた事は觀山に答へた書にも見えてゐる。風雅の道はその時代に従ふもので、治世には治世の歌があり、亂世には亂世の音がある。今日泰平の御代に生れて、開國以來亂れに亂れた保元平治以降の頃の風體を學ぶのは忌々しいことと感じたのである。これは毛詩の序の『治世之音、安以樂、其政和也。亂世之音、怨以怒、其政乖、亡國之音、哀以思、其民困』といふ思想から起つたものである。そこで心を歌の沿革の上に潜め、享保の末年に大體の考を纏め終に元文二年歌の姿古今を論ふ詞一篇を著した。その所論は可なり詳細に亘つてゐるが、人麿や赤人の出た藤原及奈良の御代の歌は、唐土の風に引かれて詩の調に似通つてゐるところがある。又千載集や新古今集時代の歌はおしなべて亡國の調である。泰平の御世の歌としては古今集に如くものはないといふのが、その説の骨子である。この考は在滿の國歌八論より五六年前に成つたものであるが、この論中に特に表出して置かねばならぬと思ふことが多い。人麿や赤人が出て歌に技巧を施すことが始つたといひ、奈良朝の末には遣唐使や留學の僧などが歸朝して唐

風を勸め奉つた爲に、歌の様が變化したと述べ、又その頃詩に倣つて七病とか求韻などいふ目を設け歌學の基を築いたことを説き、次に古今と萬葉との比較をなし、萬葉には寄りくる詞を句に冠らせて文をなしたり、あらぬことを設けそへて情をやる風が多い。又萬葉には結句を四三と留めたるが多く、古今には三四と留めたるが多いといふやうな修辭やリズムに關する細かい考を述べ、又和歌反歌の意義用法が二書に因つて異なることを説き、保元平治より文治承久にかけては國家の大故があつて、國民は痛嘆長大息すべき時であるのに、歌人は世と無關心で、憂國慨世の至情を諷つた作が出ないことを論じ、千載新古今の頃より組題といふやうなことを詠み習つて、知らぬ國の名所を東西の區別もなく詠み出し、事實にあてて見れば、間違のある徒事でも詞の縁に引かれて面白きさまに聞き迷はせるのが歌と心得るやうになつたこと、千載集から新續古今集まで十五代の選集は亂世の調であるといふことなどを力説してゐる。和歌の沿革を述べ、歌學の濫觴を説き、堂上派の準とするところを一蹴し、斬新の意見を披瀝してある。松宮觀山（安永九年歿す年九十五）はこの論を讀みて、歌學が古今集を的とすべきの説に容喙すべくもないが、學者は自ら居る所の窩窟を放れ、高山の頂から麓を臨むやうにしなければ、邪正は分りにくいからといつて和學篇一編を著し、公私・雅俗・國體・時勢の數項に分ちて自家の見を述べてゐる。即ち上世は實が勝ち後世は文が勝

つ、文體彬々たるは君子である。夷の野なるを變じて華の雅に進むは學問の道であるから、新古今もあながちに斥けられないと提言した。枝直は更に復書を作つてこれに答へ、新古今風の歌のよくないことを論じ、併せて詠草の批評をなした。枝直は延享の後に至り、愛子千蔭の爲に子に與ふる文といふ一冊子の歌學書を遺した。この頃は多少眞淵の影響を受けたかとも思はれるが、千載集より新古今集・新勅選集・續古今集はその時代から音調を考へて見て乖世の憾、亡國の悲がある。従つて大平の今の御代にはふさはない。『歌作ることの上古にもこえ、末代にもありがたかりしは弘仁の後延長の前なるべし』といつて、古今を庶幾する點は更に渝らない。この書にも歌の變遷の上に入力を入れて説いてある。

古の歌學書に關しては定家の毎月抄及詠歌大概は宜しいが、俊賴の口傳抄や悅目抄はあまり役に立たない。秘事・口訣・傳授・制詞等のつまらないことを多く述べてあると評し、萬葉に關してはその選者・時代・訓點・研究者などの事を述べ、又人麿の時から詩賦の巧に倣つて面白く作りなしたことや、家持の選集した時に相聞挽歌譬喩等の漢名を用ひて歌を彙類したので古事記に見えた歌の古名は滅んだと述べ、又古書を研究するには歴史的假名遣の必要なることを説いた。これは契沖の説を奉じたのである。現今流布の紀氏新選和歌集は後世の偽作ではないかと疑を挟み、歌合の判詞に

就きては俊成のは文が長くて説もいかげしいのがあると貶した。又人は時代の風尙に知らず知らず化せられ易いことを注意し、定家の如きも毎月抄の所説は正しいが、その家集の拾遺愚草の歌はよくないと評してゐる。又歌道隨筆たる南山雜記の中には萬葉・古今・催馬樂の語や枕詞に關する解釋などがあるが、特に言ふべき程のものもない。この他歌の巧拙は人の天稟に負ふものと考へ、従つて之が實地の指導にも個人個人によつて別にせねばならぬことを力説し、堂上家の教へ方を非難し、「東のはての人にもおしなべて都の風に詠ましめんとする」法があるかといひ、御自分の倣つてゐられる「一つの姿に詠み似せざるは皆斥け難ぜら」れるのは甚だ不法であると論じてゐる。かやうな考から、その家の集にも東うたと外題を加へたのである。

第三十二 古學派 (その四) 賀茂眞淵

鎌倉時代より維新の始にかけて幾多の歌人が出たが、新しい旗幟を立てて一世を風靡した幸運な歌人は賀茂眞淵と香川景樹とであらう。一人は尙古派で、他は尙今派だ。併しいづれもその當代に於ては新派であつた。眞淵は遠州の町外れの神官の家に生れ、始め徂徠派の人に就いて漢學を修め

てゐるが三十七歳の時上洛し、荷田春滿の門に入つた。從學四年師の逝去に遭遇し、元文三年江戸に出て帷を下した。當時人の爲に書いた和歌教訓といふものがあるが、これにはさほど新しい考はない。數年を経て延享三年五十歳の時田安宗武侯に仕へた。その當初に書いた國歌八論餘言拾遺や國歌臆說並に再奉答金吾君書のことには前に述べたから茲には略する。

眞淵は契沖や春滿の學風を承けて、漢學に徂徠が行つた所のものを國文國歌の上に行つたのである。支那の學問を修めると、どうしても先秦時代に溯らなければならぬ。支那は比較的上代が進歩してゐた、後世はさ程にもない所から、いつも尙古主義が唱へられる。この眼で我國を見れば、上代は玉綱がよく張つてゐるが、中世に至りて之が弛んで政權も次第に下に移り、文學は雄渾なものが衰へて細巧を旨とするものが行れて來た。そうしてその結果は横道にはいつて行詰つてしまつた。之に新たな生命を與へるには自然を尙ぶ上代の風に引き復す外はないと考へて、眞淵は革新の旗揚げをしたのである。新まなびに『大倭も唐も古こそ萬に宜しければ、古事を尊めれ。いづこにか古を捨て下れる世風に就けてふ教のあらむや』と喝破してゐるのは、即ちそれである。而して古代を知るには歴史は必要であるが、史その物は主に表面を描いたものであつて、脱漏は勿論そのうへ傳の違つたのもある、史家の補つたのもある。これよりも古の直ちに知られるのは古歌であると考

へて、大に萬葉集を研究し、その詞を用ひ、その詞を學びこれを以て天下に呼號したのである。氏の眼に映ずる萬葉集は朝日の照りかがやく時、杵島山を掩ひ、夕日の照りかがやく時、阿蘇岳を隠したといふ御池の大木よりも高く、上方の枝は天を掩ひ、中の枝は東を蔽ひ、下の方の枝は鄙を蔽ふぐらゐ偉大なるものであつた。これが爲に萬葉の注釋には幾たびも筆を染めた。寛延二年上野宮に奉つた萬葉解通釋は萬葉集の解釋の總論であると同時に彼の歌學である。寶曆十年に成つた萬葉考の原稿である所の萬葉集大考の一卷は更によく彼の歌學を示したものである。更にその萬葉新採百首解序附記は一層よく彼の歌學を明にしたものである。

萬葉解序の中に萬葉の研究は一切の風雅の本であることを喩へて『この木（萬葉を指す）を攀ちて四方の國形を見、古今の人の手振をさとり、或は花を摘み實を取るに及びて何のみやびも是より成り出でぬはなかりけり』といひ、又この木を以て其の高く直きを學んで天下の殿堂を作らうと考へてゐた。又萬葉新採百首解序には、古の歌は富士の山や鹽釜の浦のやうに天地自然の海山のやうであつて誠がある。中世の歌は比枝の山や琵琶湖のそののやうに、同じ自然の景であつても、規模が小さく、且誠よりも技巧が加はつたのを貴んでゐる。更に後世の歌は箱庭のやうで、技巧の末に馳せて誠が無いといつてある。而してその附記には古言を去れといふ説及時の姿を詠めなどの説を

反駁してゐる。

眞淵は元祿に生れたけれども、志は上古の人である。蓋し自然に近い上世にあこがれ、人爲の勝つた後世を厭うてゐたからである。濱町に於けるその住所は簡易素朴の生活を實現した縣居である。人は好む所に僻し易いもので、英國の湖畔詩人のスコットがロマンチックの文學に情悅した揚句に、中世のナイト士風の生活を實行しようとしたのと殆ど同時に出したのは奇といふべしだ。眞淵は上代の歌の自然であること、雄大であること、誠實の籠つてゐること、直くして力のあるのを喜んでゐた。之を以て歌の理想とし、之を人事に及ばさうと考へてゐた。それは萬葉考の始に記してある詞に由つても分る。

眞淵は種々と萬葉を研究し、時代の變遷や個人の作風に注意し、その醇雜を篩ひ分け、その純正なる成分を自分の燐燼爐に入れ、これをさまざまのものに鑄造した。その以外に上代のものといへば、萬葉に限らず、古事記日本紀でも祝詞でも神樂催馬樂でもこれを研究し、中古のものでは、古今集伊勢源氏大和物語の類にも注釋を書いたり、門人を指導したりして、その名は全國を風靡し、その門人に有爲の人を出したことが、漢學に於ける木下順庵、俳諧に於ける松永貞徳と匹敵してゐるのである。その歌學は前に述べた外に特別の冊子として出來たものもある。寛保中の作である所の

歌風小言、明和元年に著した歌意考、その翌年に出した新學びや、又寶曆十年に龍公美の問に答へた龍の公への如きは即ちそれである。

歌意考は五考の一つである。その大要は上代の人の心は純直であつたに、漢學の傳來後、人心に表裏を生じ言語が複雑になつて來たことを慨し、復古の必要を論じ、時の姿によりてよむといふ説を斥け、入り立つ道を誤ると千里の差を生ずるから戒める要があるといつて、古風の歌を奨勵し、萬葉集では考にも云つてあるやうに、一、二、十三、十一、十二、十四、の六卷を仰ぐべく、古今では詠人知らずの歌を取り、それから後では鎌倉右大臣の作を見るが宜しと勸めてあるが、眞淵の歌學の最も纏まつてゐるのは新學びであるから、その方を委しく論じやうと思ふ。

新學び第一に唱道してゐるのは調の説である。『古歌は調べを専とせり謠ふものなればなり』と尋頭に述べてある。これは在滿の説である。眞淵は更に調は人に由つて異なるが、それを一貫するものは『高く直き心』であると解してゐる。大きな歌人に就いて譬を取れば『人麿の歌は勢は御空ゆく龍の如く、言は海潮の涌くが如し。調は葛城襲津彦、眞弓をひきならさむが如し』といつた様であらう。上古の歌が崇古で遒勁であることは正しい説である。併しそれは何故であるかといふ説明が有つて欲しいのである。眞淵は奈良朝に出來た萬葉集と平安朝に出來た古今集とを較べて見て、

地理的の關係に基づくと考へてゐた。『その調の状を見るに大和國は丈夫國にして、古は女も益荒雄を做へり。故に萬葉の歌は丈夫の手振なり。山城國はたをやめの國にして丈夫もたをやめを習ひぬ。故、古今歌集の歌は専ら手弱女の姿なり。』と斷定してゐる。自然が人心に影響することは論のないことで、日本アルプスに亞いて山嶽の大きな南大和と三十六峰蒲團着て寢たる姿の南山城との地勢を比べると、さういふ差異が起るかも知れないが、奈良阪を隔てた大和川の上流域と淀川及その漆流の上流域とで、そのやうに著しい差の起つたのは單に地理上の説明ばかりでは受取れない。もつと色々な原因を考へねばならない。眞淵はその説明として、

大和國に宮敷きましし時は、おもてには建き御稜威をもて、内には寛き和みをなして、天下をまつろへまししからに、いや榮えに榮えまし、民もひたぶるに上を貴みて、已も直く傳はれりしを、山背の國に遷しまししゆ、長き御稜威のやや劣りに劣り給ひ、民も彼につき是におもねりて、心邪になりゆきにしは、何その故と思ふらむや。その丈夫の道を用る給はず、手弱女の姿をうるはしむ國振となり、それが上に唐の國ぶり行はれて、民上をかしこまず、よこす心の出來し故ぞ。

と説いてゐる。この差異は斯く政治上の影響ばかりであらうか。人麿のやうな大作家の影響や感化

といふことも説いて欲しい。尙調べに就ては寶曆七年に著した冠辭考の序にも五七の語を天地の調と名づけてある。何故に五七が天地の調であるか、又萬葉の長歌が五七調で古今の長歌が七五調に傾きかかつてゐるのは何故なるかは別に説明してない。

次には女性とその作風との問題がある。男は荒魂を得て女は和魂を得て生れるものであるから、女性の歌には自ら和かなところがある。併し我國の女は古は大和魂をもつてゐたことは男子に劣つてゐなかつた。我國の古は萬につけて母を本としたといつてその事實を列舉し、今でも高く直き心は萬葉集によつて學び、艶へる姿は古今によつてそのやうに詠めば、女性の理想の歌が出来ると思へてある。

次には古歌は萬人の眞心であることや、歌は教へなくて人を眞心になす徳のあることや、古の心や詞が分るものは古歌であつて、人はこれによつて古聖王の道を知ることが出来ると思つて歌の徳を述べてある。その他長歌を多く詠むべきことや、序歌を奨励すべきことや、題は古今六帖が善いことや、端詞は古今集が宜しいことなどを論じてある。この書に關しては約五十年の後に至り、香川景樹が新學異見を著して尙古主義を罵倒した。そこで本間素當だの、山平伴鹿だの、業合大枝だのいふ人々が批評や辯護などを書いた。それは後に述べる。茲に眞淵の門人の主なる人を擧げておく。

賀茂真淵

加藤枝直 (天明五年歿九十四)

同 千蔭 (文化五年歿七十四)

河津宇萬伎 (安永六年歿五十七)

村田春海 (文化八年歿六十六)

山岡俊明 (安永九年歿六十九)

建部綾足 (安永三年歿五十三)

楳取魚彦 (天明二年歿六十)

服部高保 (寬政五年歿六十)

内山真龍 (文政四年歿八十二)

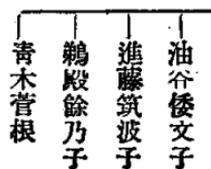
栗田土滿 (文化八年歿七十五)

田安宗武 (明和八年歿五十七)

荒木田久老 | 荒木田久守

本居宣長 | 丘岬俊平 | 松山貞主

海 量 (文化十四年歿八十五) | 長橋眉見



第三十三 縣門の諸家

縣門は實に多士濟々である。十二大家を始としてその外名の聞えた高弟が尠くない。曠世の碩學とたゞへられる本居宣長を始め、文名が天下に聞えた村田春海、優雅勁健二つながら手のものであつた歌人加藤千蔭三人の歌學に關することは章を別にして述べることにし、茲には二三の人に就て説く。彼の家集天降言に蒼古の調を謠つた田安悠然公が國歌八論に關した意見は既に説いた。公は延享三年歌體約言一卷を著し技巧を斥け自然説を唱へた。『歌は人の心を種として詠み出づるものなれば、我心につくろひたることなく、すらすらと詠み出すべし。』といひ、『古の詞を陋しとするこ

とは大きに違ひたることなり」と謂つて、淳古の風を尙び、人麿赤人二聖の風情を庶幾した。嘗て學んだ新古今風の歌は亡國の風といつて古風後風の別を立てた。古言を尊みて正しく心を述べるものが古風で、妄に詞に制禁を置くものは後の風だと論じた。この考は枝直が説と軌を一つにしてゐる。枝直は狛諸成とも交があつたから、公は眞淵を聘する以前にそれらの説を承け尙古主義に傾いてゐたらしく、この年眞淵を召していよいよその志が固くなつたのであらう。元來天資英遇の人であつたから、自分の意に合せないことには堂々と反對した。眞淵の國歌臆説に對しては前に述べたやうに臆説剩言を書かれ、眞淵辯疑の書著せば、侯は更に歌論一篇を草してそれに酬い、又眞淵の冠辭考に對し意に満たぬところを論じ、摘要冠辭考を草したといふやうに、學究的態度でこれを争つた。

縣門十二大家の隨一といはれた楳取魚彦は翁の歿後は茅生庵にあつて多くの弟子を導き、萬葉千歌を撰び、續冠辭考や冠辭懸緒などを著したが、別に歌學説を立てない。服部高保も萬葉大註・續冠辭考等を著して師の歌風を承けつぐ外に歌の所説は見えない。荒木田久老は眞淵の著を考訂し、又萬葉考の後について萬葉考槻の落葉信濃漫録を著した。内山眞龍には長歌の形式に就て考へたものがあり、海量には堂上派に反對した意見があり、建部綾足には片歌に就ての抱負があつた。宣長

千蔭春海のことは別に論ずることとし、茲には眞龍久老等二三子の説を略叙する。

内山眞龍は遠江の二俣郷の人で日本紀類聚解の外に古事記論歌註などの著がある。眞淵は長歌の創作を奨励したがその形式に就ては別に説くところがなかつた。眞龍は古事記歌註の中に長歌の形式を圖解して説明を加へた。例へば神武の『みつくし久米の子らが口垣本にうゑし蓋口ひびく吾は忘れじ討ちて止まむ』の御製は下五句は短歌の格にして、上の二句は添へて謡ふものといひ、又『楯並めて』の御製は上六句が本歌にして下三句は末の歌であると説き、又

みつくし 久米の子らが 粟生には 眞葦ひとも そ根が莖

その根つなぎて 討ちて止まむ

の御製は古調の格にして粟生には眞葦ひともとの左の對句が脱落したものと推斷し、又日本武尊の詠歌の中『海が行けば腰なづむ』の歌は長句短句長短と止まつてゐる。これは謠物の一様であるといひ、八千矛神の贈答の長歌などに就きては、内容上より句の性質を簡單に説いてある。眞淵がすすみ草の中に長歌に段落あるとの説より、その研究は一步を進めたことが認められる。

彦根の僧海量は、寛政六年長崎の時雨亭にありて偶種一卷を著した。眞淵の説を繼承して歌をよむには古今の差異を辯知して萬葉を墨繩とすべきことを述べ『今にしては今を學ぶべしとて、古に

心を掛くるをおこなりとてわろくいふこそ古知らぬ眞のおこ人なれ」と澄月等の堂上の流を酌む人に一矢を酬い、古今を宗とする人に對しては一步を進め、その根さすところの前集を味ふべきことを提言し、『古今集に心を掛けんとならば萬葉集をうまく讀むべく、萬葉集をもてあそばんと思はば記紀を心を留めてみるべし』と説き、古今集を金科玉條と仰いてゐる人を警める目的で、赤人を人麿と同列に擧げたのを不倫とし、六歌仙の評の失當を攻撃した。又續萬葉集本考の中には歌の調の如何は人心を左右し、その影響は延いて國家の上にも及ぶと考へてゐた。即ち『もてあそぶ歌の調べによりその心ばへの高くも低くも低くもつさるる習なれば、學びの道はその身一つに限るにあらず、時世にも家國にもかかることをよく思ふべし。』と述べて、萬葉の直く大きな歌を推奨し、古今六帖・新選萬葉・秋萩帖所載のものに比し、古今の歌に多少の相違のあるは古人が好む調に自ら書き改めた證左と斷じ、尙古今の序の作者に關して貫之説に疑を挟み、殊に眞名序は不正のもので、その作者に擬せられてをる紀淑望は延喜より後の人であるといひ、斯の如き文が本朝文粹に入れられたのは恥づべこときであるといひ、六歌仙評の文を排斥し左註のみだりなることを説き、物名の歌は後人の挿入添加したるものだらうと説き、旋頭歌も四首だけ載せてあるのは脱落したか、或は貫之の選に非るのかも知れずといひ、長歌を短歌と間違へたことや、墨消の歌なども後人の所爲なること

勿論であるといひ長歌の詞の平弱にして調をなさぬことを痛論し、世間の古今宗の信者に對ひてその運奉してゐる經典の不備を根柢より覆さうとした趣がある。

内宮の權禰宜荒木田久老は前にも述べたやうに萬葉考の後をついて萬葉考槻の落葉を著した。享和元年善光寺に詣て病の爲に滞留した時、人の間に答へたところを綴つた一書がある。病牀漫録とも信濃漫録とも外題された一冊子はそれである。この漫録には枕詞の釋義に關したことが主となつてゐるが、中に歌の風致の論と詞に近古なき論と二篇ある。これは本居宣長やその門下に當つた説で、歌は一首の風致詞の調べを第一とすべく、理を先として歌を評するのは諷詠の趣を知らぬ僻言であるといつて、美濃家苞の中に俊成の『もろこしまでも行く春を』の歌を難じてゐるのをもどき又宣長は後世風の歌に古言を交へ、古體の歌に後の言の交へるのは鶉歌といつて非難してゐるが詞の前後の調べによつて近古の差別はないと説いてゐる。この時宣長の死を聞き己の病の全癒を祈り『我なくば誰か説かんよ、あたら古言』と諺つてゐるが、その歌學説は淺薄なるを免れない。本居門下の花園春里は之が爲に歌の風致論辨を著し本居翁の爲に辯じ、又詞に近古なしといふ論の辯をも載せて久老の説を駁してゐる。

難波の人て久老に就いた丘岬俊平は享和四年(即ち文化元年)百千鳥といふ歌學書一卷を著した。

俊平は年平ともいひ鈴屋の門人録にも見えてゐるが、その所説は全く宣長とは異つてゐて、田安侯の歌體約言や眞淵の新學びなどの説を受けて萬葉の如き自然ですなほな大きな歌を詠むべきことを述べ、徹頭徹尾復古主義を主張してある、即ち『世々の皇ら尊の大御歌におほみ恵の厚み廣みの大御心を明し給ふはいふも更なり、臣たちは、山行かば草むす屍、海ゆかは水づく屍、大君の邊にこそ死なめ願はせじとことだて仕りてそのまめ心をあらはし給ふ。すべて古の歌は天地のなしのままなる心の底をいひ出づれば、自らなす四つの時なるが如し。云々』その折々に觸れつつ我が真心の眞なほなるを飾らふ隈なく謠ひ出づるぞ大御國の手ふりなりける。』といつてある。次に『詞は正しく情は新しきを尙ぶ』といひ、情の新しきといふのは古人の情と全くかけ離れたといふ譯ではなくて、『その心の折に觸れうつり變りゆけるが中に、或は嬉しく或は悲しく或は戀しと思ふ。これぞ日々に時々新なる情なるべし。』と解してゐる。而して久老が宣長の新古今風を詠むのを嫌つたやうに、新古今にある本歌取の歌などが、情を新しくいはうとして、變な方向へ進んだものと貶してゐる。次に和歌の變遷を論じてある。和歌の變遷を考へたのは關東では加藤枝直などが早い。京都では富士谷成章が昔からの沿革を考へ六期に分つた。これは富士谷家の歌學の章に述べるが、年平の如きこれら先輩の説に基き新に考へたものであらう。即ち萬葉の中でも山柿時代までが一期、家持

の頃に至り巧に詠むやうになつたが一期、次に古今を経て新古今時代に至つて巧を競つて名を求め
るやうになつて、人々推蔽に苦むやうになつたが一期、次には太平記に見えてゐる爲世朝臣の

おもひきや我が敷島の道ならでうき世のことを問はるべしとは

と詠んだりして、歌は君臣の間のものでなくて、世外のものとなつたのを慨いてゐる。而して貞治
の頃頼阿の二條家の風に詠み直したのが一期、それから傳授などの起つた時代といふ風に分けてあ
る。大體論であるが間違つてはゐない。この書の體裁は斑鳩の間に對し鶯が答へる。うそ鳥が口を
挟み鶯が更に答へる。他の鳥も和するといふ如く物語風に書いてある。

片歌に俳諧に小説に繪畫にその才藻を顯はさうとした建部綾足は啓蒙的の歌學書を出した。明和
二年に出したのは歌文要語で翌三年に出したのは『はしがきぶり』で、安永二年にはしがきぶり後
篇一卷を出した。明和七年には枕詞の使用に便する爲に詞草小苑を著した。併しその本領は片歌の
興隆にあつた。片歌といふのは旋頭歌若しくは短歌の上半句の獨立した短詩形であつて、日本武尊
のお作の『はしきやし 我家の方ゆ 雲居立ち來も』がその始であらうと思惟して、伊勢の能褒野
に尊の碑を建てて、花山院右大臣に片歌道守の四字の揮毫を請ひて、之を居間に掛け片歌二夜問答、
片歌東風流、古今片歌明題集、とはじ草などを著し、『敷島の道は雅びの心深くして凡俗に適はず、

俳諧は俗に入り易けれど趣卑しきを免れず」といつて片歌の唱道に努めた。併しこの十七音若しくは十九音の短詩形は大きな發達を見るに至らないで漸次衰滅に歸した。その著作中片歌に關した論も多少はあるが茲には委しく述べない。山岡明阿が類聚名物考三百六十一卷を著し、その中に歌の部を設け、歌故事・和歌の體裁・枕言・疊句・言掛等の修辭・書式・註釋・考證・歌話・天爾波等に就き、古今の説を二十七卷に收めたことも特記すべきである。

縣門には女流の作家も少くなかつたが、歌學に關した著作のあるは唯青木菅根のみである。天明二年に成つた葦垣は詠作の法を略述し、和歌八重垣の中の詞釋の誤を正したものである。

第三十四 古學派に對する反對及辯駁

古學派の矢面に立つて、これに矛を向けたのは堂上家自らではなくて、その教を受け若しくはその流を斟んだ民間の人々であつた。契沖對橋成員のことは既に述べた。茂睡が梨本集に對しては反對が起るべくして起らなかつた。要するにその人が無かつたからである。後松井幸隆門下の赤井一貞といふものがあつて、延享の始に管見問答を著し、二條派の教を問答體に述べ、その末に萬葉集

を歌の根本と立ててゐる古學派に對し、之を異端と見做して攻撃を加へた。その言に『今の世に生れて古の道に復るは、聖人もとりたまはぬことなり。和歌の風教また此の如くなるべし。彼萬葉集こそは和歌根本よとて古今より以下を誹る人は皆異端にして、まづは禮儀を知らぬものなり』といひ、又『萬葉集の歌の風體に今の歌をも詠むべしといふものは、たとへば、千年も以前の衣裳をきてその時の風儀になるべしといふものなり。當時の政道に背くといふものなり。』と述べてゐる。天子の御流儀は天下の流儀であつて、人の彼はいふべきものでない。お上の用ひさせられてゐるのは二條派であるから、これに背くのはよくないといふ考から來てゐる事大的の說である。

次に武者小路實岳の門に學んだ垂雲軒澄月（寛政十年寂す年八十二）は寛政五年和歌爲隣抄二冊を著し、當流の立場からして古學派を排斥し、特に契沖が正濫抄を著して定家の假名遣を斥け、古今餘材抄中に定家治定の證本にここかしこに不審を加へたのを不當とし、大に罵聲を放つた。澄月は古今集を以て萬代の規矩とし、草廬集を以て和歌中道の龜鑑とたたへてゐる人であるから、萬葉をば喜ばないのは當然である。即ち『萬葉は……人情淳朴にして思ふままにいひつづけて當時の耳には平懐なる詞づかひなきにあらず。例へば深山木の自然と形つきたるを、山にて見れば面白きやうなれども、根こじて都にうつし植るときは、ここを揉め、かしこをしじめざれば用ひがたし。』と

嘯へ、その註釋に關し契沖の功は認めてゐないではないが、今時の歌に用ひ難いものであるから、必要のところ骨折つたものとしてゐる。趣味の鑑賞は時世に由つて變るといふのは宜しいが、古典の研究の不必要を唱ふるは淺薄である。澄月は更に語を繼いで代匠記は博覽の所爲なれども、畢竟花鳥の模様であると貶し、『古今は定家治定の證本世に傳りて、一字をも加ふべからず。餘材のうち、ここかしこ不審を加へたる所、畢竟定家を難詰し、已が不傳の臆説をもて、末代歌人の情を抽かむとのみ思ひ立ちたり。この道の隙隙餘材に過ぎたるはなし』と我が佛の支持につとめ、又その註釋も宜しきを得ないと『契沖の如き和歌の浦の鹽合一滴の味をも知らずて、歌書を註するごとに三代實錄の系圖を持出でて、まづ博學を賣る市を立て、證歌の過分なるは三輪の杉材過ぎて足らず、一首の評に於ては釐の塵泥ふみ違へたれば、白雲たなびく空言のみしたり。』と惡罵を放つてゐる。傳統に固つた人の意見はかかるものかと一驚を喫する外はない。

澄月は和歌を極端に尊いものと思惟してゐた。『我朝には神儒佛の學あり。この三道の大道を得てあらゆる事實道理の詠まざることなきを歌道とす。』といひ和歌は神州第一の大道である、國風を思はんものは他の學術をも捨てて、専ら詠道を樂しむが善いと奨め、和歌の功能は神精修養になり、風雅の樂は人を安住ならしめるといふ考から、『風雅は貴きものなり、詠歌の力よく心中の塵を拂

ふ。花鳥風月は私なくして人を慰むるものなり。』といひ、創作時の靜寂が大切なることを説き、藝術といへども忠實の心を以て貫くものは國家の至寶であると考へ、『歌道の忠直をいはば詠作のみ生涯の望として脇目せざる心なるべし』とその熱心を主張し、又歌學を顧みざるものも、之に拘束されるものも共に偏見であると説き、又詠歌本紀に載つてゐる『天下の治安は風俗にあり、風俗の邪正は詠歌にあり』といふ主義を信仰してゐた。又詠歌大概の説を奉じ、草庵集を規範とし、定家頼阿、逍遙院を斯界の先覺と崇め、又戀の歌のよむべきことや、人が戀の歌を作る心裡の經過をも略説してゐる。その中には當時の新思潮に觸れたところもあるが、大體からいへば二條派の埒外に出ないと謂つてよからう。

次に冷泉爲村に學んだ大愚和尚慈延はその隨筆隣女晤言の中に契沖の歌學を非難してゐる。河社を評すといふ題で三十餘條につきて意見を述べ、『契沖といふもの出て世の歌よみの風いやしくあしざまになりしが嘆はしさに』云々……といつてゐる。慈延が著には堂上家の和歌會式等の教を録した和歌聞書がある。勅選集の各時代選者歌數及その批評を諸書より抜いて意見を述べた二十一代集概覽がある。吉田令世の歴代和歌勅選考はこれを完成した趣がある。澄月や慈延は歌學派の倡首たる契沖に向つて以上の如き攻撃の矢を向けて居るが、萬葉を提げて復古を高唱した眞淵に對して

は唯間接に非難してゐるだけである。大僧都元宜の集にも宣長の歌を評し古學派の惡口をいつてる。尙公卿の間には古學を奉ずるものは異端と見做し、甚しきは朝敵であるとさへ評した。眞淵門下の村田春海に學んだ清水濱臣の如きは文化四年朝敵辨を著し、その妄を辯じたのでもその間の消息は窺はれる。濱臣は儒道・入木道の例を引き、すべて學問の道は公平を尙ぶものである。誰が唱へた説でも善ければ用ひるべきで和歌の道もその通であると言じたのは當然過ぎる程當然である。

古學派に對し、以上に擧げた堂上派以外に別にこれに反對する一派が起つて來た。それは川語に於ける尙今派である。技巧の末に趨つた時に自然に復れといふ呼聲は天下無敵である。併し眞淵の唱導したところは古道を知る爲に和歌を學ぶのであつて、その用語は萬葉時代の古語を使用するのであるから、學者には了解が出来るが世上一般の人には通じない。又古語を操るのは現代語より餘程むづかしいからその方に力が費されて、自づと面白い趣向を案する精力が殺がれる。末流に於ては、それが特に甚しく、さながら趣味のない古語の行列を以て歌となしたやうなものが多い。その弊竇を衝いたのは平安歌人の小澤芦庵や伴蒿蹊や香川景樹である。芦庵は塵ひぢの中に萬葉派を屬つて『後世の姿詞一切用ひず。萬葉日本紀を身と蓋との箱にして、この中を出づることならざる歌人あり。これは末代の衰へたることを厭ひて、古代の未だとのほらざるを知らず。云々、住居

飲食にていはば宮殿定まれる後に穴に住み、火食するときに至りて生物を食ふが如し。又この箱の中にありて是を最大一究竟のことと思へり。知らずや、これ皆古人の糟粕なることを」と道破してゐる。伴蒿蹊は國歌八論評中に『詞は遠くでは今の人の心を動かすこと無かるべし。』といつて、同じやうに尙古派を排斥してゐる。

芦庵の教を受け清新な歌風を起した香川景樹は更に烈しく之を駁撃した。その意見は新學異見に見えてゐる。(文化八年始めて書下ろした時には新學考といひ後新學異見と改めた。)即ち景樹は眞淵が古の歌は謡ふものなれば調を重しとしたといふ説に反對し、往古歌ふといふは大抵は聲を引くの稱であつて、今日のやうに譜節をつけて謡ふとは異なる。それゆゑ歌といふ名稱に泥んで詭つたとするは謬である。古歌の調も情もとのへるのはひとへに誠實から出てゐるからである。誠實から出來てゐる歌は即ちそれが天地の調であつて、空吹く風の物にあたつて、その聲をなすやうなものであるといつてゐるが、眞を尙ぶといふことは眞淵も唱へてゐたことである。次に眞淵の萬葉と古今との差異に就き、大和國は丈夫國で山脊國は手弱女の國であるといふに對し、これは時運の然る所であつて國土の上にかけていふべきでない。古は大和も山城も丈夫風で後の世は山城も大和も手弱女風であるのは眞淵の説では釋けないと難じ、次に眞淵が古今序の六歌仙の評につき、かの時代

にはのどかにさやかなのがよくて、強く堅いのが鄙びてゐると決めてゐるのは、その國その時の姿を姿としたもので、廣く古を顧みないものだと言つたのを、景樹は『その世の體を體とせずしていつの體を姿とせんと』難じ、眞淵は丈夫風を尙んでゐるが、さやかといふ方が却つて文華の風・都風であつて、強い方は質朴の氣象で自ら鄙俗であると反對してゐる。又古今集が出てから柔びた方が歌と思ふやうになつたのは甚だ善くないといふ眞淵の説に對し、東帯して立てる姿は平弱で賤しく、金革で固めた方が剛強で貴いときめるのは間違つてゐると論じ、次に萬葉を常に見て之に似るやうにといふ説に對し、歌は情のゆくまゝにひとり調が出来るもので、思慮を加ふべきものでないから、古に擬似しようとする邊はない筈だ。これは古い歌を讀んで事變に達するといふ學問の道と詠歌の道とを混同したものだ。歌はそれぞれ自分の思を盡す外には道がないから、何も型にするものを要しない。鎌倉右府の歌は悉く古調をかすめ、古言を割きとつたやうであるから、志のあるものは決して見るべきものではない。況して模ふべきものでない。自分の情を任げて古調に似せうとするは技巧の甚しいものであつて、自然には遠ざかるのである。又いろいろと眞淵は學書を擧げてゐるが、歌には大した要はない。文章はことわりを本とするが、歌は感を專としてゐるから、文の上には兎に角、歌には不必要であると斷言してゐる。要するに景樹は今の世の歌は今の世の辭で、今の世

の調でなくてはならないといふ主義を以て古學派に對したのである。景樹はまた文化十二年に百首異見を著して契沖の改觀抄や眞淵の初ひ學の説を破らうとした。これも古學派を嫌つての企てである。景樹の新學異見に對し、古學派の流を酌む人々はそのままには捨て置かなかつた。千蔭門下の柳千古に學んだ肥後の本間素當（天保十二年歿す年五十六）は文化十四年に新學考加難を著した。まづ調の説に關し、景樹が『往古の歌は自ら調をなせりといふべし、意を用ひて調べなしたる物とおもへるは大錯へる事なり』といふ自然説を駁し、上古の歌でも意を用ひて調をなしたものだと言證を擧げ、景樹は我が古典や古歌を知らないから誤があると斥け、次に眞淵が大和國を丈夫國といひ、山城國を手弱國といつたのは少し過論である。難者のいへる所も一應は尤に聞えるが、その國柄によつて人の強弱はあることである。唐人と皇國人とは古から強弱の差があるのである。難者は動もすればその世の風、大御世の調など口癖にいふが、それは果して見分けが付くかどうか。上古の歌でも今に通へるものがある。又中古の歌でも今日とは餘程かけ離れたものがあると、時世ばかりに偏してゐる點をうつてゐる。又難者はその世の情態を聊も偽らないのが、道の正しい調であるといつてゐるが、人々が各真心から詠み出した歌は自然の調であるから、それがその時世の風調に合はないといつて不正といはれようかと衝き込んでゐる。

次に景樹が直淵の復古主義に反對し、頻に時の姿とか今の御世の姿といふのは何てあるかと詰り、時の姿といふにも、今ていへば古體もあらう、近體もあらう。作者が心の向々てさま／＼の體を詠み出したならばどう扱ふか、難者の今の御世の姿といつてゐるのは古今集の頃の姿を指してゐるやうだが、彼の時代は唐風がは入つて皇國の古風が段々に變り、歌のさまも善くない方に向つた。難者は漢意にひかされて、強きは質朴の氣象であつて自ら鄙俗だといひ、甚しきは上世の天皇の御所爲・大宮造に至るまで大方鄙しい。歌もその通りだと妄言を吐いてゐるが、それは論外として古今時代は皇威がやうやく衰へかけてゐて、古今集には貫之一人の好んでゐた優美といふやうな歌ばかりに傾げようとしてゐる。萬葉時代には人麿のたけく大きな、黒人のあつく細やかな、赤人の清く高い、憶良のふるくかたいなど色々あつて、翁のいはれたやうに、『のどにも、あきらにも、さやにも、おくらにも』それ／＼各自の所長を收めて、而も之を貫くのに高く直き心を以てしたのとは比較にならぬ。萬葉に似るやうにといはれたのを惡口をいつたり、鎌倉右大臣の詠は見るべきものではないなどいふ説はとるに足らない。難者は『今の世の歌は今の世の調にあるべし』といつてゐるが今の世の辭といふのは俗言のことか、又今の世の調べといふのは彼の小さき袋に物を多くこめたやうなくだくだしい賤しい調か。要するに『難者は人にいみじく思はれむが爲、歌に文に己が一家を

立てんとて、人の説の善きもあしきも分きためなく妄に破するのみならん」と評してゐる。古學派を回護しすぎた所もあるが、景樹の弱點を突きびしく衝いた所が多い。素當を先輩としてゐた中島廣足は、この書に書入して一層剗切に景樹の説を攻撃した。又本居宣長の高足藤井高尙に學んだ備前の業合大枝は文政二年新學異見辨を著した。まづ調に關し、「歌は誠より出る故皆調も情も自らよく整へりと思ふは萬葉をよく見ざるもの」だと翁のために辯じ、又此論者の如きは歌は作るものといはば忌々しき非説なりと思ふであらうが、歌は實に作るものだ、その師高尙の教をうけて技巧説を主張し、天地の調といふにつき難者はこの調といふことをいかに考へたかと疑ひ、「心は自然といふべけれど、調は自然のしらべにはあらで人々の受得たる心をもて調とす」と説き、又景樹が「歌は情のゆくまにまにひとり調の成りて思慮を加ふべきものならねば、古に似せんとするの違あらんや」といふに對しその妄を辯じ、よき教にならふことは何の惡きことがあらうといつてゐる。又景樹の今の世の歌は今の世の辭にして云々といふに對しては、もし今の世の俗言をいへるならば、妄説の中の妄説であつて、ひたすらこの道を亂さうとする妖魔の所爲だと難じて、歌詞と俗言とは早くから差別のあつたことを例證を擧げて説いてゐる。

次に村田春海の教を受けた山平伴鹿も文政十一年に新學異見辨を著し、五十四年の昔に出た翁の

著述に對し、景樹が時世も考へず、吹毛の難を見付けて己が名を賣らうとしてゐるのは善くないといつて逐條に辯じてゐる。その要を撮んで述べて見ると、天地の調などいふ説は言廣くいかめしげに聞えるが、歌はただ人情詞の境のものであつて、天地までは及ぼし難い。且景樹は誠實と調のこゝとを雲や水に喩へてあるが、有情と非情との差別のあるものを混同しては善くない。感情と調とは關係はあるが、感情即ち調と見做す工合には行かない。譬へて見ると物に觸れて感ずる情は裸の姿の如く、既に詠んで成つた歌の調は衣裳着た姿のやうなものである。

次に縣居翁の丈夫風弱女風に就て景樹はひたすら時世といふことを説いて、一國の上にあてて論じてはいけなしいつてゐるが、翁は平安遷都後風俗歌體に至るまで變移した所に着目していはれたので、言を足して見ると國土と共に時運の上にも及ぶのである。難者はその時の姿を姿とする説であるが、歌は世と共に段々降下してゐるから、古の高い所に手本を求めなくてはならない。滄浪詩話に「學其上僅得其中、學其中斯爲下矣」といつたのは尤だ。翁は萬葉を常に見てこれに似るやうにといはれたのを、ゆゆしき妄論だと評したのは間違つてゐる。中古以來先達を師として學ぶやうになつてから法則がなくてはならない。入木道でも同じことて手本がなくてはならない。併し手本をならつたとて古人の眞似ばかりするのではない。そこには矢張自分といふものがあらはれ

る。詩を學ぶものが盛唐を慕つたり又宋により明を真似てもその人の作となる。斯ういふ風で萬葉を學んでゐても古言は即ち我が今の調になる。歌もこれと同じことである。翁が明和實曆の頃古學を擲げた功は大である。香川氏はその澤によりながら功を功とせずして疵を求めるのは木に住む鳥の枝を枯らし、野に臥す鹿の草を荒す類である。次に又翁の古學を見よといはれたにつけ、景樹はさういふ歌ばかり年月讀んでゐると、知らず知らず虚遠に馳せ眞心を失ふといふに對し『歌は詞よりよむものにあらず、抑も心は主にして詞は奴なり。されば古事記萬葉の詞盡く奴として使ふべし。心の主が詞の奴を使ふに何か遠きに馳することあらむ』といつて、詞と心との關係を説き、景樹が今の歌は今の世の辭にして云々の説に對して詞に今古を立てられぬ。往古の詞でも今用ふれば悉く今の辭であるといひて、中古の歌人が古語を復活させた例を擧げ、今の世の辭といふことは別にないと斷じ、調も亦その通りて往古より今に至るまで世々の調を悉く今詠み出せば今日の調と云はねばならない。併し調は後世から見えていふのでなければ定まらない。今日は民間に行はれてゐる古言を庶幾せる體と堂上あたりに行はれてゐる近世風の體とあるが、その一つを今の調と定める譯には行かない。それゆゑ今の辭とて古書にある辭を使つたといつても禁じる譯にはゆかない。難者のやうに詠歌は己が思を盡す外なければ何を模とし何を學ばんといふ論は見識は高いやう

であるが、初學にはそんな不親切な譯にはして置かれぬ。鎌倉右府の歌は古調を踏襲し古言を割裂してあるから見てはならないと評してあるが、割裂して用ふるのは悪いことでない。古風に似せても古調を踏襲するといふことはないことだ。古歌に似せても後から見れば古歌は自らその時々々の風韻がある、擬古は自らその時々々の氣象があつて、その際は分明であるから、香川氏の説の如く情は托るべき様もなく、詞はいかて世を欺くことはあらうかと辯じ、景樹の説は要するに復古を妨げやうとする外道であると結んでゐる。

その他齋藤彦麿に師事した新庄侯戸澤正令も詞のしもと一卷を著し條を逐うて新學異見を難じ、井中の蛙大海を知らぬ類と斥けた。その中に古の歌は自ら調をなしたといふ景樹の説を難じ、言と歌との區別を知らぬものであるといひ、長歌の冠辭の如きは全く調の爲に用ふるものである。すべて調がなくては歌でない。又歌は訴へたなどの説も宜しくない。同書の序文に熊谷直好がうるまの人と語らふやうだと古學を誹つてゐるのは重き罪人であると尤めた。尙今派の景樹の投げた異見に對しては、國歌八論ほどには無かつたが、古學派の人によつて可成澤山の解難の書が出たのである。そして古調新風の善惡及調に就ての議論は漸次緻密に論じられやうとする傾向となつたのである。